山は山である、姦淫は姦淫である。吾人は此物理的乃至社會的事實を如何ともすることが出來ない。併し山と云ふ物理的存在の意義は之に對する人の態度によりて頗る多樣である。林學者は此處に日を慕ひて上に延び行く樹木の戰ぎを聽かう。採鑛家は此處に暗きに唸る金銀の叫びを聽かう。姦淫と云ふ社會的事實も亦同樣である。政治家は之を社會秩序の破壞と觀ずるであらう。詩人は茲に肉慾をそゝる誘惑の魔力を感ずるであらう。詩人は茲に個人を驅使する運命の壓迫と、戰慄しつゝ相擁する人情の悲哀と、肉慾に支配さるゝ人生の恐怖とを觀るであらう。

山と云ふ物理的存在、姦淫と云ふ社會的事實は藝術の題材とはなり得ても、其內容とはなり得ない。藝術の內容は此等の客觀的事實の與ふる意義である。精神的經驗である。作者の態度によりて或は暗く或は明るく染めわけられたる山の姿が始めて吾人の描寫の內容となるのである。同じく姦淫の題材を取扱ふ藝術と雖も、詩人の眼を以て之を見たるものと、蕩兒の眼を以て之を見たるものと、藝術的內容としての意義に徑庭あること、猶姦淫を題材としたるものと孝悌を題材としたるものとの差に劣らない。同一の題材を取扱ひたる藝術は凡て其內容の價値を等しくすると考へるのは藝術に對する俗見の筆頭第一である。

3

描寫の題材を取扱ふに一定の態度を以てすること、前後態度を異にする場合と雖も轉變の間に一種の統一を寓することは藝術の効果を確實に

し鮮明にする所以である。如何なる藝術と雖も(沒理想と稱せらるゝ沙翁の作も、有の儘の眞を寫すと稱する自然派の作も)意識無意識の間に作者の態度が其底を流れて觀照の方向を指導してゐないものはない。之を感知する能なき者は藝術を翫賞する資格のない者である。如何なるノーブルなる態度によりて照されたる內容をも、持合せの野卑なる態度を通じて之を穢く塗潰して了ふ者は作者に對して申譯のなき藝術の冒瀆者である。

4

わかり易い樣に一二の卑近なる例を取らう。「曾根崎心中」生玉社の場、お初德兵衞邂逅の處で、お初が樣々と恨みを述べたあとで「嘘なら是れ此

痞を見さんせと手を取て懷のうち恨みたる口說泣」の場面がある。此場面には固より暫く相逢はなかつた男女の肉慾の衝動があらう。併し此肉慾を溫かに包む物は逢瀨稀なる戀の嘆きである。「焦るゝ胸の平野屋に春を重ねし雛男」と「戀知りの初樣とて町一番のぼつとり者」との美しき姿勢である。此しめやかに溫かなる氣持に同感する者は「イヨ御兩人」と賞めても「畜生燒けるぞ」とは怒鳴らないであらう。唯お初の肉體に觸るゝ德兵衞の手の感覺をのみ想像する者は藝術の世界に遊ぶ資格のないものである。

5

日外上野に展覽會のあつた時、或人が裸體畫の前に立つて前に垂れた

手の下をためつすかめつ覗いてゐたと云ふ話をきいたことがある。餘り馬鹿らしいから嘘だらうと思ふが、萬一之が檢閲吏であるとしたら如何に立派な高尚な裸體畫でも皆風俗壞亂にして了ふに極つてゐる。夫子自身が裸體畫の手を邪魔にする男だからである。世界の一切から風俗壞亂以外の印象を受取り得ない人格に出來上つてゐるからである。

6

色盲の一種に單色視（モノクロマート）と云ふのがある。世界が一色にしか見えないのである。描寫の態度を解する能力なき者は人生の單色視（モノクロマート）である。而も其多數は道學先生を色情狂にした樣な不愉快極まる色を以て一切を塗潰し、如何に美しい色を見ても常に穢い〳〵と仰有るのだから堪らない。此の如く單色視（モノクロマート）の多い社會に於て、善良なる風俗を保たむが爲には、單に題材のみを見て文藝を取締るのも亦已を得ぬことであらう。吾人の遺憾とする處は寧ろ精神上の色盲によりて代表さるゝ日本文明の現狀である。深い自覺もなく唯其時の潮流に浮かされて書いて來た模倣者流や春畫製造人に些の同情もないが、藝術的態度を把持して一切の生活を描寫せむとする眞面目なる藝術家は本當に氣の毒な世の中に生れ合せたものだと思ふ。

7

上述の所論は藝術の內容に關する極めて初步の（而も頗る流布せる）謬見に對する、極めて淺薄なる分析に過ぎない。併し描寫の題材及態度に關

しては更に根本的の問題がある。

題材を取扱ふ作者の態度には總じて二樣の差別がある。第一は題材となる對境の生命を如何なる方面に於て看取するかと云ふことである。第二は此の如くにして看取したる對境の生命に對するに如何なる主觀的態度を以てするかと云ふことである。第一の態度のみを以て題材を取扱ふ所謂客觀派の藝術は對境の生命を活躍せしむれば其能事は畢るのである。鑑賞者に訴ふる處も亦此活躍せる生命であつて此生命を心裡に經驗すること以外何の要求もない。第一の態度に加ふるに第二の態度を以てする主觀派の作者も、其題材に對する態度は或は感傷であり、或は皮肉であり、或は同情である。主張の態度を取るものは極めて小部分に過ないのである。譬へば茲に人生觀上の虛無主義を取扱ふ小說があつても、第一の態度を以てする者は唯彼等の心境の描寫に興味を持つ丈である。第二の態度を以てする者と雖も、大多數は或は虛無主義を生むに至れる社會の事情に感傷し、或は虛無主義の主張と生活とに現れた數多の矛盾を冷笑し、或は虛無主義に陷る迄の心境の變遷に同情する丈あつて、社會生活の形式として之が實行を主張せむとする者は極めて少數であらう。藝術の正統から云へば其の職分は觀照と描寫とであつて主張ではない。世界の所有狀態と心境とを經驗せむとする藝術家は固より一切の境遇に自らを置く能はざるが故に、大抵空想裡に之を經驗するに滿足してゐる。此空想裡の經驗を現在の社會に適用するの當否を決定するには更に幾段の

考慮を要する。總じて藝術的態度は考ふると行ふとの間に非常の間隔を挾む態度である。藝術家は常に其描寫せる狀態を社會上に主張し實行せむとする者と思ふは誤解か買被りか兎に角由々敷混同である。

8

併し畢竟するに觀照は觀念上の實行である。對境の精神を深く、强く、鮮かに心裡に經驗するに非ざれば觀照は全きを得る譯に行かない。此意味に於て虛無主義を描寫せる小說を鑑賞する者は自ら空想裡に虛無主義者となる者である。姦淫の小說を鑑賞する者は心に姦淫を犯す者である。假令之を取扱ふ作者の態度により、又は此內容を批評する自己の理性によりて、全體の印象は虛無主義又は姦淫を否定するに結着するも、兎に角一旦虛無主義者となり姦淫者となることなしに觀照は成立し得ない。殊に作者にありては其思想其閱歷其人格の全體が描寫の內容と呼吸を一つにするに非ざれば生命ある作物は出來難いと思ふ。藝術の作者及其愛好者が自己と作物と、觀照と實行との區別を口實として、其內容に對する責任を逃れむとするは卑怯である。固より觀念的實行と社會的實行との間に區劃を設くるは、藝術家の社會的生存上當然の用心（プルーデンス）であるが、社會生活と思想生活との區別を徹して更に深き理想上の見地より見れば、全然皮肉と嘲笑との態度を執るに非ざる限り、姦淫を描寫する藝術家は何等かの意味に於て姦淫の價値を主張する者である。姦淫と云ふ社會的犯罪の形式中に何等かの價値ある態度心境を盛り得ることを承認する者であ

る。第一義の倫理的見地よりすれば姦淫は必ずしも罪惡（無價値）ではないと云ふ思想上の根據なくして――或は論理的歸着點として此根據を豫想する所信なくして――姦淫を題材とする藝術は成立し得ないと思ふ。姦淫を最大罪惡とする公教的信條と姦淫者の道義的偉大（信實執着等）を承認する人間的精神との矛盾はダンテをしてパオロとフランチエスカとの影を見て氣絶せしめた。姦淫者の心境に對する同情（或點に就て姦淫者の倫理的意義を承認すること）なくして、神曲地獄篇の花は咲かなかつたであらう。此花を咲かしむるの當否は別問題である。兎に角此花は自己の存在に就きて倫理上の責任を持つことを免れない。況してダンテの如く氣絶することなくして姦淫の描寫を敢てする後世の藝術家が描寫の

內容に就きて責任あることは勿論である。此の如くにして描寫の材料と態度との問題は第一義の倫理問題に聯關する。此問題に關して常識と矛盾する見解を提出する藝術が常識の迫害を蒙るは當然である。

9

問題は漸く提出された許りである。所謂反道德の內容を有する藝術の題材と態度とに就きては更に題を改めて說き及びたいと思ふ。

（四十三年九月）

二、内生活直寫の文學

1

誰の發明か能くは知らないが、近來「あの小説は作者と即き過ぎてゐるから駄目だ」と云ふ樣な非難が批評の型となりかけてゐる樣である。又性格や場面が浮出してゐるか否かを唯一の標準とする考へは昔から有觸れた月並の型乍ら今でも隨分巾を利かしてゐる樣に思ふ。固より他人の話をしてゐる樣な顏をし乍ら内々自己吹聽や自己辯護をやる樣な態度は如何にもさもしいに相違なく、浮彫にすることを覘ひ乍らちつとも浮んで來ない樣な藝は見苦しいに違ひない。併し凡ての文藝(小説丈でもよ

い)は皆作者と離れてゐなければならないか、浮彫以外に文藝の能事は有り得ないか、之は隨分疑問である。

作家と即き過ぎてゐると云ふのには大體三つの意味がある。第一は前に云つた樣に作者と作物とが即いたり離れたり迂路々々してゐるのである、若くは離れた樣な顏をし乍ら其實は脊中でくつついてゐるのである。態度の統一を缺くもの、意志の誠實を缺くものは固より醜いに違ひない。併し第二には讀者の態度が出來てゐない爲に作者と即いて見える場合があることも忘れてはならない。吾々が友人の作物を見る場合などには初めから作者其人と作物の世界とを引離して見ることが出來ないことが多い。此場合には吾人に其作物の客觀化の程度を判する資格がないのであ

つて、作者と即き過ぎて見えるのは必ずしも作其物の罪ではないのである。更に假令知らぬ人にもせよ作者の素性や品行を探偵する積で小説を讀む手合には如何なる作物も凡て即き過ぎて見えるのは當然である。實際如何なる作物も作者と即いてゐない物は一つもないからである。問題は作品其物の中に自分の因果關係で動いて行く獨立の世界が出來上つてゐるか否かにある。其世界の中に作者自身が横合から飛出して氣まぐれな神様の様に奇蹟を行つてゐないか如何かにある。其世界と其世界に住む人物が作者の内生活の俘を傳へてゐることは始めから判りきつた話である。第三には作者が自己の内生活を描出するに急な爲に讀者の眼に愬へ耳に愬へるに都合のよい様な様々の恰好を拵へて呉れぬ場合である。

茲に於て作者と即き過るなと云ふ注文は浮彫にせよと云ふ注文と同一である。吾人の抗議は此點に關する。話上手や人形遣ひの外に猶舞踏の詩人があると云ふのである。

2

ニイチエの「悲劇の誕生」以來殆ど誰にも異議のないことと思ふが、空想（ファンタジー）の詩人、姿勢態度の詩人以外にも情熱の詩人、内生活醗酵の詩人がある。アポロ型の詩人には世界が浮上つて見える。生命が姿勢態度の幻影と相即して見える。併しディオニユゾス型の詩人にとつては世界は内面生活の舞踏である。リズムが彼の世界の一切である。故に彼に取つて關心の題目は唯夢の様に漂ふ思想感情情緒其物である。彼の文藝は彼の醉歌で

ある。彼の小説は唯酔中の世界を取り出して其處に置くのである。字義其儘の darstellen である。客觀描寫の文藝、浮彫の文藝の外に此別天地あることを知らざる者は色盲である。此別天地に向つて浮彫說の美學を適用する者は藪睨である。自然主義の餘黨には此種の色盲と斜視とが少くない。

3

アポロ型の藝術家が其技巧を盡して浮彫を刻むことは固より結構なことに違ひない。名匠の作は其姿勢態度に即して魂あるが故に、デイオニユゾスの徒をも亦驚嘆せしめるに足る。唯悲むべきはデイオニユゾスの徒に生れ乍ら浮彫の美學に迷はされて其不器用な手に鑿を採る連中である。彼等にとつて姿勢態度は製作の本來の動機でない。故に彼等は自分の情調に都合のよい物象を方々から借り集めて覺束ない客觀の家を建てるのである。彼等の客觀描寫は大道具の骨寄せである、宙乘の岩藤となることは甚だ覺束ない。何故に借物の衣を脱いで自己本來の面目を明かにしないのであらう。何故に「囚はれたる」藝術觀を嘲つて更に文藝の天地を開拓しないのであらう。明治の文明貧弱なりと雖も貧弱の哀歌はある筈である。少くとも自分には貧弱の哀歌がある。聲を合せて歌ふ可き人は誰ぞ。

4

最後に云ふ。「浮出す」とは描出せむとする者を遺憾なく描出するの意

ならば固より異議はない。然し彼等の浮彫説は視覺にアナロジイを有する特殊の錯感（イリウジヨン）を要求するに過ぎない。異議なきを得ざる所以である。

（明治四十四年八月廿七日記）

三、內生活直寫の文學（再び）

1

嘗て東京朝日に書いて意を盡し得なかつた短文の趣旨を別樣の方面から再説することを許して戴きたい、

出發點を自分一個の經驗にとる。貧弱なる自分の意識の奧にも時として表現を求むる渾沌たる或物の蠢きを感ずる場合がある。自分以外に存在する對象に向つて其價値を判定せむとする批評でもなく、自己以外の人に向つて自分の經驗を傳達せむとする說明でもなく、況して他人の爲に享樂の方法を準備する職業としての創作でもなく、唯內に溢れる經驗

を外に排出せむが爲に、內生活醱酵の最後の階段として其完成を證據立てむが爲に、恰も抱擁に急ぐ相思の人の如く、純粹に內部の必要に驅られて表現を要求する場合がある。此の際に於て自分の努力の目標となるものは、如何にして此經驗を他人に通ずる樣に說明す可きかと云ふことでもなく、又他人をして同樣の經驗を味はしめる爲に如何なる條件を準備す可きかと云ふことでもない。表現に熱したる自分にとつて上述の意味に於ける客觀化は第二義に墮したる閑事業に過ぎない。自分は唯內に動く經驗に妥當なる表現を、此內生活醱酵の一節に結語となるに足る可き表現を、只管に追及するのである。此の如くにして生れたる文藝は個人の內生活其物の一部であつて、決して社會的事業ではない。武者小路君の言葉を籍りて云へば、(多少誤解を招き易い不便はあると思ふが)、自己の爲の文藝であつて、決して他人の爲の文藝ではない。結果から云へば固より他人の爲となることもあらう。動機は純粹に自己の爲である。

2

斯う云つて來れば所謂自己の爲の文藝は必ず內生活直寫の文藝でなければならぬ樣に見える。併し之は自分が自己の經驗のみを語つた爲であつて、其實此兩者は當然分析して考へらる可き事柄である。自己の爲の文藝の中にも內生活直寫の文藝と然らざる物との區別がある。此區別を生ずる原因は個性のタイプである。此タイプの相違を自分は前にアポロ型とディオニユゾス型と名けた。或は之を常識的の意味に於ける小說家

と詩人との對照と名けることも出來やう。若し思想家の語を以てニイチエの樣なラブソディストめいた抒情詩人めいた頭腦を意味することを許されるならば、藝術家と思想家との對照と名けても甚しく妥當を缺くことはあるまい。

3

アポロ型の人と雖も固より純粹に自己の內的衝動に應ぜむが爲に製作し得ることは云ふ迄もない。併し此型の人に在りて製作の衝動となるものは、何物かを表現することであつて、或事を表現することではない。或對象を眼前に据ゑて之を觀照し、或渾沌たる物を整理して或形像を拵へ出す處に其中心興味があるのである。觀照する者と觀照さるゝものとの區別を明にした上で觀照する方の手續に愛着を感じ、構成さるゝ材料と構成する活動との間に明瞭なる區劃を置いた上で構成する活動に執着するのである。一言にして盡せばアポロ型の人を驅りて製作に向はしめるものは內容の壓迫に非ずして表現の活動に對する渴望である。彼等は鑿を採りて木を刻み、何の變哲もなき木のはしの馬となり犬となり行く面白さに微笑するのである。彼等の內に動くものは何物かを拵へむとする衝動である。彼等は何物をも刻まざるの寂しさに堪へ兼ねて鑿を採り泥を捏ねるのである。從つて其文藝は自ら浮彫の文藝たらざるを得ない。浮彫の文藝にありては其內容が自己なると他人なると、人生なると自然なるとの差別なく、「刻まるゝ物」の資格に於て同一の取扱を受ける。一切

が彼にとりて所謂「客觀」である。藝術家としての天分豐かなる人は大低多量のアポロ性を持つてゐる樣に思はれる。

4

併しデイオニユゾス型の個性は表現するの歡喜を感ずること少くして經驗するの歡喜を感ずることが多い。嚴密に云へば表現の活動を經驗するの歡喜を感ずること少くして、更に端的に內容を經驗するの歡喜を感ずることが多い。故に書くと云ふこと製作すると云ふことは、彼等にとつて決して樂しい遊戯ではない。殆んど內容となる經驗の力に壓迫されたる本能的反射、若くは苦しき勞作である。衷に動く不可思議なるもの、息苦しく、蒸暑く、懷孕の私事に對して母に復讐せむとする胎兒の如きものを其全きが儘に分娩せむとするのが彼等の唯一の努力である。固より一刹那の絶叫は知らず、多少なりとも複雜なるものにありては、內容となる經驗を客觀として觀照し、又之を材料として構成する作用を交へずには、此分娩を全くし得ぬこと勿論であるが、此の如き觀照の力と構成の能力とを單なる方便として、只管に內生活の光景を最も如實に、最も妥當に描出(ダールシテレン)せむとするのが彼等の唯一の努力である。アポロ型の個性が一切を客觀視して、之を描寫するの活動を精神生活の內容とするに反して、デイオニユゾスの徒は一切を精神に飜譯して、精神生活の內容として價値あるが故に之を描寫する。故に彼等は其文藝をして自己の內生活と共に舞踏せしめむとする。宇宙の一切を招致して自己と共に舞踏せしめ

むとする。三千世界が我が心と同じリズムを打つて流動せむことを要求する。自分は浮彫の文藝に對して之を内生活直寫の文藝と名けたいと思ふ。

5

話が再び自己に歸る。自分は決して常に純粹なる内的衝動のみに促されて筆を執る者ではない。併し偶々許されたる時に於いて、自分の個性の發動の仕方はどうもディオニユゾス型に屬する樣に思はれる。と云つても何も自分が詩人として思想家としての天分が豐かだと自惚れるのでは決してない。唯貧弱なる者にも傾向がある。自分の貧弱なる傾向がディオニユゾス型に屬してゐさうだと云ふのみである。扨不思議なる因緣の和合によつて、意識の奥に表現を求むる渾沌たる或物の蠢動を感ずる毎に、自分は此内生活を表現するに妥當なる形式を求めて戸惑ひする。主として浮彫の文藝を基礎として抽象されたる在來の概念を以てすれば小説も詩も劇も論文も悉く此内容を盛るに適する形式ではない。我が内面の世界は常に滿されざる寥しさを懷いて未だ知らざる形式を待焦れてゐる。此不滿の中には固より技倆の缺乏を歎く焦燥がある。併し同時に浮彫の美學が文藝のあらゆる内容を包容するに足らぬことをも立證してゐることを疑はない。

6

第一に小説の形式を籍らうとする。自分には形を拵へる爲に形を拵へ

る興味に乏しいから、自分の感興に忠實ならむとすれば、直ちに小説の仕上げにムラが出來る。直接に精神を表現しやうとムヅ〳〵してゐる身には、此精神を間接に暗示する方便として外貌を描寫してゐるのは隨分齒痒い。直接に情調を出さうと焦つてゐる心には、煙草の吸ひ方や髭の捻り方によつて性格を浮ばせやうとしたり、風貌を活躍させやうとしたりする迂路を辿るのは甚だ辛い。或程度迄は努力と勤勉とによつてやつて出來ないことはないと云ふ自惚はある。直接の感興を離れて職工に墮落しなければ自分は到底之をやり遂げることが出來まい。藝術家の天分なき自分が小説の形式を籍りて内生活を描寫することは根本的に間違つてゐさうに思はれる。

第二に詩の形式を籍らうとする。自分の性急にして刹那的なる感興を盛るには此方が小説よりも遙に適してゐるに違ひない。併し詩とは在來のやり方で行かなければならぬものとすれば、自分には先づ中心情調を浮ばせる爲に瓦斯燈の青く顫へる線や、カステラの手觸りや色々の道具立をするのが五月蠅い。道具師が舞臺の道具を集めて來る樣に方々から拾ひ寄せなければ、從つて心にもない嘘を吐かなければ、自分には新しい詩が作られ相にもない。其上に從來の七五五七調は固より口語詩でも何とか詩でも凡て其リズムが僕の心のリズムとピタリと合はない。切つたり接いだり色々の細工をしなければ自分の内生活は日本在來の詩形に篏

らない。斯う考へて來ると詩も亦駄目だ。

8

第三に劇の形式を藉らうとする。魂と魂とが切結ぶ刹那を表現することは隨分自分の感興の性質に合ひ相に思はれる。壓搾した會話で表現する遣り方も小說などよりは自分の性に合つてゐさうである。併し抽象的の觀念を盛る爲に色々の人物を製造したり、筋を賣る爲に仕出しを使つたり、藝の細い處を見せる爲に煩しい寫實をやつたりすることは、浮彫の興味が少い自分には出來ない。況して今の芝居では居合拔の平五郎が佐久間織部となり、色男がツイ一寸道具屋にお使に行つた後姿を見送つて、湯女が淨瑠璃を使つた愁嘆を見せ、思出した樣に森の梢にヒヨコリと浮んだ片破月を見て、二百兩欲しい處に百五十兩しか手に入らなかつた水野十郎左が「月は出でゝも片破月」と思入をする。自分にはとても新しい芝居は書けない。

9

第四に論文こそ大に自分の內生活を直寫するに適しさうである。併し自分の內生活の醱酵は微かなる音を立て、底の方にブス〳〵してゐるに過ぎない。其感想は斷片的で纏まつてゐない。若し論文とは道具立を莊重にし、システムを堂々と張らなければならぬものとすれば、自分は嘘を吐くより論文を書く方法を知らない。自分の關心事は中に盛られたる經驗である。纏めること、構成することを中心興味とするものは往々藁人

形を其軍勢の中に加へる。

10

話が辷つて勝手な熱を吹いた。自分が表現の機關として小説にも詩にも劇にも論文にも不滿なのは要するに自分の感興其物が中途半端で、自分の性質が疎懶怠慢を極めてゐるからである。若し自分がもつと勉强で辛抱强くなつたならば、小説と劇とでも優に此貧弱なる内生活を表現するに堪へやう。若し自分の内生活がもつと系統的となり、自分の官能と神經とがあらゆる外物に即して精神を讀むことが出來る様に微細となつたならば、詩と論文とが自分の目的に對して絶好の形式とならう。唯自分の缺點は十分に承認した上で、次のことだけは認めて貰ひたい。自分の焦燥を貫くものは「直接性」の要求であると云ふことだけは認めて貰ひたい。デイオニユゾスの要求は mehr Unmittelbarkeit である。内生活直寫の用に堪へむが爲めには劇も詩も小説も論文ももつと内化されなければならぬ。もつと正直な、素樸な、直接な、端的なものとならなければならぬ。又此種の文藝を鑑賞して、他人の内生活の閃光を捉へむとする者は、潑溂たる精神を以て鋭敏なる反應に堪へる者でなければならぬ。文藝と云ふものは眠つてゐてもくすぐつて起して呉れて、ホウレ御覽、解かつたらうと眼前に突き付けて見せる可き筈のものと考へるのは、餘りに横着である。餘りに虫が好さ過ぎる。

11

書いてゐる途中に無駄話の興味がチョッカイを入れた爲に、後半の論理がしどろもどろになつて了つた。併し自分は此陳套の題目を三度繰り返して讀者を煩す程厚かましい男ではない。唯文藝の內化（Verinnerlichung）と云ふことに就いては機會があつたら更に論を進めて見たいと思ふ。

（一月第四水曜午後一時）

四、文壇の社會問題

1

私は今の文壇に社會的興味を提唱す可き柄ではない。御前は實際旺んな社會的興味を持つてゐるかと問はれゝば、私は正に其正反對ですと答へるより外はない。文壇の社會的方面に活動することは、私には出來ることでもなければ、從つてしやうと思ふことでもない。六ケしく云へば私の「あらず、あり得ず、あらむと欲せざること」を敢て說かうとするのは、畢竟個人的興味に沒頭する者の心に宿る不安を披瀝して、私と興味を異にし性格を異にする個性にアッピールするに外ならない。甚だ蟲の好い注

文乍ら、自分の出來ないことを他の人からやつて戴きたいのである。

2

假に私が身を後世文明史家の地位に置いて明治末期の文學を考察の對象としてゐるとする。私は第一に他人の暗示によつて蠢動する大多數の文士を除外する。そうして多少なりとも獨立の思想を有し感覺を有し表現法を有する少數の文學者を選び出して其間に共通の傾向を求める。其結果として到着する諸の特徴の中でも「個人的興味」の如きは最も顯著なものに違ひない。他に適切な題目が思ひ當らないならば、私は此一節に名けて「個人的興味の時代」と云ふかも知れない。今の文壇は積極的にも消極的にも個人的興味の階段に立つてゐる樣に思はれる。

3

と云ふ意味は固より考察又は描寫の對象として社會的事實を取扱はないと云ふのではない。家庭朋友情人等の社會的事實をも除外するとすれば思想も文藝も殆んど其對象を失ふことは云ふ迄もない。今の文壇と雖も古來の文壇と等しく人と人との關係を其主なる題材としてゐる。而も可なりの鋭さと執着とを以て之を取扱つてゐる。唯此類の社會的事實を取扱ふに個人的興味の立場からしてゐることは爭はれないと云ふのである。換言すれば人と人との關係を取扱ふも、其關係が個人の運命感情情調に影響する點を興味の中心としてゐることは爭はれないと云ふのである。但し茲に云ふ個人を唯個人と云ひ放つた丈では未だ其意味が徹しな

い。個人とは象徴的の個人である。換言すれば他人に非ずして自己である。故に個人的興味とは一切を「自己の問頭として」取扱ふ興味である。

4

更に「自己の問題として取扱ふ」とは、單に自己が其問題に對して活潑な興味を持つといふ意味ではない。一切の對象の中に自己を見、一切の問題の中に自己の問題を讀むの意味をも含んでゐる。約言すれば自己は興味の主體（スブエクト）であると共に又客體（オブエクト）でなければならない。如何なる社會的興味と雖も、苟もそれが眞實で濃厚で强烈である限りは、第一の意味の個人的興味を離れることが出來ない。唯第二の意味を附加するに至つて、個人的興味は社會的興味に對立する概念となることが出來るのである。

5

固より客觀的に云へば個人と社會とは常に分離した存在ではない。併し主觀的に云へば、換言すれば興味の客體として見れば、如何に個人との融合完全なる社會に在つても、注意の燒點が異るに從つて、既に興味の所在が異るのである。自己の安否を慮ると同樣の親しさを以て社會の休戚を憂ふる時代に在つても、直接に社會を興味の客體とする者と自己と社會との關係に興味の燒點を置く者とは――シラーの言葉を籍りて云へばナイーフに社會を愛する者とゼンチメンタールに社會を愛する者とは――自ら內界の相違がある筈である。況して現在の文壇に於いては社會と個人との乖離が頗るエンフアサイズされてゐる。彼等の見る處が客觀

的眞理であるか否かは今詳しく論ずるに及ばない。唯此の如き主觀的態度が社會的興味と個人的興味との分離を更に鮮かに描き出してゐる事實丈は拒むことが出來ない。

6

要するに今の文壇に於いて多少なりとも注目に價する人は大抵自己の家を築くに急にして、又他を顧るに遑がない有樣である。問題を自己に置くこと、心の眼を內に向けることは固より此上もなく望ましいことに違ひない。此の如くにして現今の文壇は眞正の生命と深さとを獲來るのである。併し現在の文壇を支配する個人的興味は單に上述の積極的方面を有する許りではない。消極的に云へば個人的興味は社會的興味の減退若くは閑却を意味してゐる。而も其根底には多少社會に對する反抗の意味あるが故に、個人的興味は素朴に、無邪氣に社會的興味を雲烟過眼視するを得ずして、强ひて冷視し輕視し回避するの匂を帶びるのである。故に現文壇の個人的興味には他に對する顧慮と拘泥と感傷との痕がある。此の如くにして文壇は社會と乖離し、文壇の人は文壇其者さへ背反するのである。少數の幸福なる人を除けば、私は多數の才幹ある人の態度に就いて、此の如き消極的の個人的興味を讀まざるを得ない。

7

上述の心理を最もよく例證する事實は現文壇に於ける批評の衰頽である。所謂評論の大部分は小說にも劇にも詩にもあらざる創作である。評

論は社會的現象に對する客觀的批判に非ずして評論家の主觀的表白である。狹義の批評と名く可きものは新聞雜誌の一隅を占領する月評家の遽しい漫言を除けば殆んど全く存在しないと云つてもよい位である。私は此現象を捉へて文壇不振などと騷ぎ廻らうとは思はない。此現象の底に潛む深い心理的事實を認める私は――同時に此心理を殆んど代表的に自ら經驗してゐる私は――此の如き慷慨の言をなす資格を毛頭も持つてゐない。併し此現象は恐くは永續す可き現象ではあるまい。此方面に現文壇の弱點が存在してゐることは何と云つても爭ふことが出來ない。

8

若し現今の文壇には社會的方面に何の問題もないと云ふのならば議論はない。併し個人的興味の消極的方面には既に社會と個人との矛盾に對する感傷を含んでゐるとすれば、文壇及び文壇の人は自己の事業と存在とを主張せむが爲に、多くの戰ふ可き戰を有し、多くの焦慮す可き社會問題を持つてゐなければならない筈である。然るに社會と個人との矛盾は文壇の人に戰鬪を敎へずして籠城を敎へた。籠城は畢竟回避である。若し回避によつて矛盾を避け通すことが出來るものならそれもよからう。到底避け通すことが出來ないものなら、遁げて廻る者の末路は自滅の外はない。此處に個人的興味の不安がある。

9

文壇に於ける批評家の任務は大體二方面を有すると云ひ得やう。第一

は他の社會に對して自己の存在を防禦し、其存在の意義を發揮することである。第二は醇正なる趣味と深刻なる頭腦とを以て文壇の進歩を指導し、矮小なる、野卑なる、暴慢なる群小の跋扈を防ぐことである。外に向つての自衛と啓蒙と、內に向つての指導と催進と破邪と――孰れの方面に於いても現今の文壇には批評家の健闘を俟つ社會問題が轉つてゐる。

然るに現今の文壇に於いては實力ある批評家は愚か、批評家を以て自ら任ずる者さへ容易に見當らない。やれば出來さうな人はあつても、彼等は能はざるに非ずして爲さざるのである。爲さざる者の個人的心理に立入つて見れば、批評の如く煩瑣にして而も自己を高むるの實効が少いことをしないのは聊かも無理ではない。批評の衰退は寧ろやむを得ざる人文狀態である。唯眞正なる批評家の出でざる限り、現今の文壇は外自らを衛る機關を缺き、內相互の間に於ける興味と思索との聯絡を缺く、無力な、バラ〳〵な、影の薄い一社會に止まつてゐることは爭はれない。

10

と云つた處で現今の文壇に社會的興味が旺盛に湧き出さない限り、更に適切に云へば社會的興味の饒かな個性が生れ出でない限り、此潮流は如何ともし難いことは云ふ迄もない。私は唯個人的興味に沒頭する者の不安を披瀝して、自分と異る個性に訴へやうと思ふ丈である。

11

發賣禁止の橫暴を見る毎に、脚本檢閲の峻酷を聞く毎に私の社會的興

味は屢々覺醒される。併し自己の家を築くに忙しき私の心は此社會的興味を鎭壓し冷笑して、再び個人的興味の中に不安なる睡眠を續ける。私の社會的興味は近來岩野泡鳴氏著「發展」の發賣禁止によつて又攪亂された。私の見る處を以てすれば「發展」は衆俗との第一戰を宣するに都合のよい著作ではないが、兎に角此問題は從來の如き怨嗟嘲笑の態度以外に更に執拗と熱心と實行的氣分とを以て論じ返さなければならぬ問題であると思ふ。

（大正元年八、二八朝）

五、作家と批評家

1

批評家のない文壇の寂しいこと、心細いこと、存在の根柢の薄弱なことは嘗て聊か之を訴へた。併し之は「文壇の爲に」存在する――換言すれば「自己の爲に」存在せざる、更に換言すれば批評と云ふ仕事に對して確乎たる主觀的根據を有せざる――批評家を要求するのではない。批評と云ふ職業によつて文壇に立身せむとする職人を要求するのではない。批評と云ふ事業によつて自分の生活內容を第一義的に擴張し得る個性の出現を翹望するのである。

批評と云ふ事業の主觀的根據、內部的衝動、並びに其道義的理（ジヤスティフィケーション）由——此問題は可なり困難な問題である。

2

或種の作者は意識的にか無意識的にか批評家を自分の道具と心得てゐる。自分の文壇に於ける立身を扶助す可き義務を批評家に負はせてゐる。即ち或作者は自分の作物を褒めない批評家を見識のない批評家だと思つてゐる。或作者は自分の名の世間の耳に親しくなることを喜ぶ爲に、何よりも默殺する批評家を恨む。そうして啄まるゝことによりて其種子を擴布する植物のやうに、批評家の糞に交つて各地に傳播されることを喜ぶ。

併し批評家が作者を立身させる爲に存在してゐるのではないことは云ふ迄もない。唯批評家が自家の目的を追ふて自家の事業を遂行する間に作者を浮沈させる社會的勢力と交渉するに過ぎないことは云ふ迄もない。

此方面からも問題は批評の內的衝動に歸つて行く。

3

創作は作者が直接に自然と人生とを材料として魂の家を建てることである。其建てる家の大きいと小さいとを論ぜず、兎に角魂の家を求める傾向は大抵の人に共通の傾向である、而も此衝動は立派に創作的活動に道義的理（ジヤスティフィケーション）由を與へるに足る純潔なる內的衝動である。

批評も亦第一義的事業となり得る爲には何等かの意味に於いて魂の家を建てることでなければならない。併し建築の材料――他人若くは時代の思想感情空想等を通じて見たる自然及び人生――が創作の場合に比べて甚だ限られてゐる爲に、此限られたる材料――比較的間接にして抽象的な材料――の上に自己の魂の家を建て、若くは自己の魂を擴張しやうとする衝動も亦比較的少數の人に限らるゝのみならず、此等少數の人に在つても其純粹なる成立は割合に困難である。約言すれば批評に對する內的衝動は創作に對する內的衝動に比して一面其數に於いて少く、一面不純となり稀薄となり、從つて種々の墮落に陷るの危險を多量に含んでゐる。此事は偉大な作者となることと偉大な批評家になることとの困難を比較したのでないことは云ふ迄もない。唯主觀的充實並に純潔の點に於て批評家の困難が作家以上であることを明にすればよいのである。

此論理は眞正の批評家が乏しい事實を說明する。同時に善良なる批評の少い事實を說明する。

4

私は前に「自己の魂の家を建て、若くは自己の魂の家を擴張しやうとする衝動」と云つた。此處に眞正な批評家の二樣の立脚地がある。第一は批評の對象を理解せむとする努力である、對象の意義を闡明せむとする努力である。更に分析して云へば、批評の對象を文明史的若くは美學的原理に還元して說明するか、或は批評對象の解剖によつて文明史上若くは

美學上の原理に歸納せむとするの努力である。此くの如くにして批評家は其の理智の光を增し、其魂の家に一層鞏固なる基礎を置くことが出來るのである。

之に反して第二の立脚地は理想又は思想の事實化に在る。個人的生活の社會化に在る。通俗なるエッキスプレッションを用ゐれば主義の宣傳、社會の精神的征服を目的とする志士の事業に在る。批評家は此の途によりて思想(ゲダンケ)を實在(ダーザイン)となし、個人(インデンヰウヅムス)を全體(ガンツエス)となし、自己の魂を社會の魂とすることが出來るのである。

併し此二種の區別を根底迄突き詰れば恐くは皮相的となるであらう。純粹に理解の爲にする理解は批評に規範的の一面を與へる根據を齎すことが出來ない。批評は――批評家を現代と現代の人とに向はしむる批評は――多かれ少かれ、或思想(ゲダンケ)を批評の對象に就いて事實化することを求めてゐる。故に詮ずる處批評の內的衝動は常に第二の立脚地に歸着するであらう。詳說すれば第一の立脚地は一方に於いて「事實の思想化」として第二の立脚地に對立し乍ら、一面事實を思想化する動機には逆に思想を事實化せむとする要求を含んでゐる點に於いて第二の立脚地に歸着するのである。但し此場合に於いても思想の解釋に至つては甲と乙と自ら內容を異にし易い。第一の立脚地に在る者は事實化せらる可き思想を批評せらるゝ對象に內具すと解するが當然である。第二の立脚地に在る者は思想と對象とを超越的、二元的に解する傾向なきを得ない。簡單

に云へば前者を「生命の事實化」後者を「理想の事實化」とでも名く可きであらう。孰れにしても對象に於ける思想の事實化（此場合には同時に個人生活の社會化）を措いて批評家の內的衝動は存在し得ないと思ふのである。

5

上述の抽象的詮議によれば、强烈なる事實化（社會化）の衝動を貯ふる者に非れば、熱烈にして生命あり、純粹にして內的必然に溢れたる――從つて又眞に道義的ジャスティフイケーションを有する――批評家となることは出來ない。此原則は特に現今の日本に眞正の批評家なき事實を說明す可き種々の痛切なる理由を提出する。

第一に現今の日本には一般に事實を思想化する衝動――哲學的衝動が少い。加ふるに現今の日本文明（特に日本文壇）は思想化の材料として取扱ふ可く餘りに貧弱で、餘りに野卑で、餘りに窮屈で、餘りに滋味に乏しい。固より渾沌と亂雜とは論理的分析の興味を唆すこと勿論であるが、解剖すると共に經驗し、考へると共に味ふことを求める哲學的衝動にとつて內容の下らない對象は要するに思想化の興味を動かすに力なき事實である。故に僅かに保たれたる哲學的衝動は日本現代の文明と文學とを捨てゝ遠く外國と古代とに走るのである。此の如くにして日本の現代に批評家なき理由と、日本の現代が批評家を生まざる理由との一面は構成されるのである。

第二に思想を事實化する要求から見れば、此貧弱に野卑に窮屈に滋味

なき文明――而かも犇々と吾人の精神を圍んで吾人の生活を暗くする文明――は、改革の要求と反抗の感情とを刺戟して現代の批評を鋭利にしなければならぬ筈である。實際此種の感情が現代の精神的文明に携はる者に淡く普及してゐることは爭はれないと思ふ。併し所謂破壞的批評と雖も根底に樂天的氣分（オプティミスティシエ、シティインムング）のない處には其の活力を汲む可き根源がない。然るに日本現今の文明狀態（特に精神的文明に就いて云ふことは斷る迄もない）は此の如き樂天的氣分を許さぬ程に淀んでゐる上に、思想家自身の中にも此沈滯せる雰圍氣を逸脫して猛烈に自己を發揮する程の元氣がないのである。斯くて內外兩面の無力（インポテンツ）は、思想と事實との矛盾を熱烈なる批評に導かずして、懶惰なる冷淡（インディツフエレンツ）と卑怯なる冷笑とに導いたのである。

第三に事實化を求む可き思想がない。思想が確立せぬ限り、事實化の要求は單に漠然たる氣分に留つて、力ある主義となることが出來ない。力ある思想が生れない先に、如何にして思想の事實化を根本衝動とする眞正の批評家が生れ得やうぞ。

第四に、而して最後に、一切の根底は現今の社會と個人との間に緊密なる連鎖が――命がけの鬪爭も親密なる抱擁も――ないと云ふ事實に歸着する。物質上の事は知らず、精神上の事に於ては此恐る可き命題が悲む可き事實として現代の文明を支配してゐる。從つて眞正に兩者の融合を要求する內部的醱酵がない。各個人に取て最も根本的なる生活は先づ此

社會的顧慮を斷絶して個人的興味の中に籠ることである。個人的興味の中に籠つて先づ自己の爲に魂の家を建てることである。多くの尊敬す可き友人の執りつゝある途は、同時に私自身の執らむとする途は亦茲にある。文明の機運が未だ眞正なる批評家を產出する迄に進んでゐないのである。

6

併し社會的事情が批評家の出現を助成しないと云ふ事實は必ずしも批評家の衝動と素質とを有する個人の出現を妨げない。確乎たる根本思想と、强烈なる事實化の要求と、事實化の可能を信ずる樂天的氣分と——此三拍子が揃つてゐる人は如何なる世に於いても批評家となるの資格がある、否、批評家とならずにはゐられないのである。固より其根本思想が批評の對象を微細に明晰に照し出す程に深刻でもなく鋭利でもない際には其人の批評はドンキホーテ的滑稽の臭を脫れないであらう。併しドンキホーテ的滑稽の臭は態度の眞摯と崇高とを傷けるには足りない。彼は少くとも態度に於いて立派なる批評家である。私はせめて態度に於て眞正なる批評家の出現を翹望するの念に堪へない。

序に私自身が所謂「自己批評」をする烏滸がましさを許して戴きたい。私は事實に於ても素質に於いても到底批評家ではない。私は思想の社會化よりも事實の思想化により多くの興味を持つてゐる。私は他人の事業を批評する場合には大抵動機の不充實と興味の缺乏とを感ずる。私の批

評は前述の二つの立脚地中其孰れにも根據を拵るて居ない。私は唯「精神的雰圍氣に對する敏感」と云つた樣な曖昧な立脚地から批評の衝動を發作的に感ずるに過ぎない。私の批評論は私の批評家でない爲に生じたる省察の斷片である。

「精神的雰圍氣に對する敏感」に就いては次に之を說きたいと思ふ。

（十月六日）

六、作者と批評家（重ねて）

1

社會の問題を痛切に自己の問題として考へることは、心量の大きい人でなければ容易に出來ることではない。自己の思想を社會に行はむとする熱烈なる衝動を感ずることは思想の大きく熟した人にして始めて能くする處である。之を思へば自ら許して批評家となることは決して容易な業ではないのである。

併し凡ての人が皆批評家となる可き義務を負ふてゐると云ふ譯ではない。批評家以外に第一義の事業がないと云ふ譯では猶更ない。されば眞

正に批評の衝動を感ぜぬ者は、沈默を守ることが自己に對しても他人に對しても最大の善事である。道義的自覺なき批評家は人間の屑の又屑である。

2

作者は自己を自己の儘に出せば事が足りる。更に適切に云へば直接に自然及び人生に就いて自己を出せば事が足りる。然るに批評家は批評の對象に就いて自己を出し、對象を貫いて自己を出さなければならない。從つて他人の思想感情空想に對する煩瑣なる分析と精細なる洞察とによつて、先づ對象其者に對する客觀的理解を得なければならない。而も批評の對象は人間意識の所產であるから、作家自身既に自己の事業に對する自覺と批評とを持つてゐる。故に批評家が多くの場合に其勞力の報酬として受取る處は作者の反抗と不平とである。批評家は此反抗と不平とを鎭撫するに足る客觀的理由を持つてゐなければならない。要するに批評とは五月蠅い仕事である。

批評家にとつて此煩しさを償ふに足る者は、恐くは唯社會に對し、他人に對し、道に對する愛の自覺のみであらう。理想を事實化せむとする純潔なる衝動の餘儀なさのみであらう。此衝動に强ひられざる批評家は自ら欺き他人を欺きて胡魔化しの綺語を並べるか、或は其任に堪へずして退却する。退却するは正直者である。綺語と豪語とを以て自ら修飾する者に至つては最も救ひ難い。

3

他人の事業、他人の內生活に對して徹底せる理解を得ることは決して容易なことではない。此困難を十分に自覺してゐるかどうか、此事を私は所謂批評家に訊いて見たい。

他人の作物又は思想を批評する者は必ず先づ其作物又は思想を根底から理解しなければならない。此意味に於いて凡ての批評は必ず客觀的である可き道義的責任を持つ。他人の作物の批評と稱して自己の偶感を談ずる者は不德義漢である。

他人の作物及び思想に聯想して自己の感想に耽ることは各人の自由である。その感想を談ずることも亦た各人の自由である。併し其の感想は

飽までも讀者自身の偶感であつて、作物其の者の批評ではない。讀者の偶感と作物の批評とを混同する處に作者及び思想家に對する冒瀆は成立つ。所謂印象批評は往々此弊に陷り易い。

他人の作物に就いて自己の偶感を語らむとする者は明瞭に偶感と批評との間に一線を劃せよ。更によき事は自己の感想を純粹に他人の作物及び思想と交渉なしに發表することである。他人の思想及び作物を刺身のつまに用ゐることを以て、自己の感想を具象的にし客觀的にすると考へることは迷信である。

批評家は嚴正なる意味の批評によつて自己を出すことが出來る。併し此際の自己は他人の作物並に思想の客觀的理解に即して必然的に沁出て

來る自己である。肆意の自己ではない。偶感の自己ではない。

4

特定の人名を指し、特定の文章を指定して批評することは極めて責任の重いことである。十分の客觀的理解ありと自信する（誤謬の有無は問題ではない）ことなくして、漫然として他人の名を指し他人の文章を引用するは無責任である。漠然たる一般的の感じを表現するには漠然たる一般的の言語を用ゐよ。之は卑怯に非ずして責任を知る者である、他人の人格を尊重する者である。

序乍ら私の小さい經驗を話したい。一つは上述の理由により、一つは特定の事實に觸れるよりは寧ろ人間心理の永遠のチユプスに觸れる事の興味によつて、私は屢々一般的に人性の弱點を悲む哀歌を書いた。然るに其結果は不思議にも多くの人によつて暗に其人を難じた者だと解せられた。例へば警鐘の音が遠近の村々に通じて思ひがけない處から之に應ずる反響を聞く樣に、私の自ら囁いた言葉は思ひがけない人々の間に樣々の面白い反應を呈した。そうして私の創作は彼等の間に批評として働いた――併しこんな話は批評家を論ずるに何の關係があることでもなかつた。

5

所謂批評家は他人の長い間の勞働、久しい間の思索の結果（原則として之を云ふ。例外のあることは云ふ迄もない、例外の多いことも亦疑がなさ

さうである）に對して、一讀乃至再讀の後に隨分利いた風な批評を下し勝である。而も作家としては到底兼ね難い諸種の問題に對して、事もなげに種々の言ひ懸りを付ける者が多い。彼等の頭腦は實に雋敏にして、彼等の趣味と理解とは實に多方面である。

併し人間の能力には限りがある。廣い者は大抵何事にも深きを得ざるは陳套にして悲む可き眞理である。從つて批評家が種々の問題に觸れることは一面から見れば作者及世間の輕蔑と嘲笑とを買ふことである、作者及世間の前に自己の姿を滑稽に描き出すことである。此の如き役目を十分に自覺してゐるかどうか、私は機會があつたら此事を我親愛なる批評家諸君に訊いて見たいと思つてゐる。

他人の思想や感情や事業は、其自身に於いては吾人にとつて間接であり抽象的である。併し利害により、愛憎によつて結び付けられたる他人の思想や感情や事業は直接に活潑に潑溂として吾人の眼前に躍り易い。故に吾人は單に「思想を事實化する」の衝動に依て批評の興味を感ずるのみならず、又「個人的利害」の衝動によつて容易に批評的態度に驅られ易い。

此處に於いて批評の內的衝動に對する眼界は俄かに廣くなり、俄かに現實の光景に接近して來る。此世界に於いて重大なる役目を演ずる者は今や「思想の事實化」と云ふが如き古風の衝動に非ずして、嫉妬である、競爭心である、直接並に間接の自衛である。交換的默契的相互賞揚である。

此の如き悽惨なる動機を自覺して批評の筆を執る樣な惡人は恐くは一人も居ないであらう。併し職業として批評の筆を執る時、此種の惡戯者が無意識の幕の裏に隱れて尊敬す可き批評家を操ることは或はないとも限るまい。

之に比べれば商賣として何事かを書かなければならぬ苦し紛れに、當人にとつても怪しい出鱈目を並べる批評家の方が遙かに無邪氣で遙かに憎氣がない。出鱈目を書かなければ生きて行かれない境遇に對しては、同病相憐むの感情も交つて、私は深く同情を寄せる。併し同じ出鱈目を書くにしても、願くは他人の仕事にいゝ加減な言ひ懸りを付ける樣な品の惡い事でなくて欲しい。自分で吐いた唾を自分で浴ることは之を他人の顏にひつかけるよりも遙かに男らしい。

7

私の思想は例によつて悲觀に過ぎた。批評家の出現を翹望する者が批評難を數へてゐる許りでは仕方がない。「思想を事實化する衝動」は餘りに高く、餘りに峻しく、此途によりて批評家の出現を望むは要するに偶然を望むに過ぎない。私は更に淺近にして人情に近き途の一端を暗示して此斷片的省察の稿を釋かなければならない。

私は前に社會と個人との交渉が親密でない事實を擧げて現代の日本に眞正の批評家なき所以の根底とした。此事實が一面に於いて、社會との親密なる融合を要求する感情の醱酵を抑へてゐることも亦前に之を述べ

た。併し「要求せぬ」と云ふ簡單な言葉に籠められた意味は可なり複雜である。各個人は社會と融合し得ぬと云ふ事實に對して決して無頓着なのではない。唯彼等には融合の可能を信ずる樂天的氣分を缺くが故に、眞面目に之を要求する氣にもならないのであつて、其意識の奥には孤立の寂さが蠢いてゐるのである。孤立の寂さは彼等をして半ば無意識に社會との融合を翹望させてゐるのである。此感情は私の批評論の最初の出發點であつた。同時に此處に批評家の出現を促成す可き社會的事情の芥子種がある。

無意識の奥に潜む融合の希望は其半面に精神的雰圍氣に對する敏感を伴ふ。雰圍氣に對する敏感は個人生活相互の交渉の主觀的條件である。

精神的雰圍氣に對して敏感なる者は孤立して幸福なるを得ない。此處に批評的氣分（ペヂーヒグルンド）の動因（ガ）が成立する。唯樂天的氣分の缺乏は各人の批評的衝動を內攻せしめた。批評は言語に現るゝに先ちて各人の腹の中に行はれた。併し精神的雰圍氣に對する敏感に樂天的氣分が加はれば其處に淺近なる——而も純粹なる——批評の內的衝動は成立する。此處暫くの間、注目す可き批評は恐く此方面から出て來るであらう。此階段に在つては優秀なる作家が最も味ある批評家である。此際の批評は作家の魂と作家の魂との挨拶だからである。

併し此種の批評家は常に其根底の薄弱と動機の淺近とを感ぜざるを得ないであらう。主觀的に云へば彼の批評とは偶然の接觸より生する精神

的動搖の社會的表現に過ぎない。客觀的に云へば彼の批評には未だ思想上の確乎たる基礎がない。故に其批評にはディレッタントの臭があつて、內部的漲溢の猛烈なる勢力を缺くのである。

茲に至て議論の環は又發端に歸る。眞正なる批評家の內的衝動は畢竟「思想の事實化」でなければならない。

（十月六日夜）

七、出鱈目

1

私は話の非常に下手な男であります。ですから何か話をしろと云ふ注文のある時には何時も逃げて廻つて許りゐるのですが、帝國文學會で御話をすることは一年か一年半許り前から小林君との宿約になつてゐるものですから、到頭逃るゝに途なく出掛けて來た樣な次第であります。題は出鱈目となつてゐますが、之は小林君に御返事を上げる時にどんなことを御話すればいゝかわからなかつたから、出鱈目でも申上ませうと云て置いたので其當時は出鱈目を申上る積りではなかつたのです。併し其

後少し忙しいことがあつて、今日迄何も準備をする時がなかつたものですから今日申上ることは本當に演題通りの出鱈目になつて了ひました。何も纏つた事はありませんからきれ〴〵の事をパラグラフの間に一行の○を置きながら御話申します。非常に話が下手な上に內容に連續がないのですから嘸御聽苦しいことだらうと存じます。或は皆樣を置去りにして氣狂の樣に獨り言をするに過ぎないやうになるかも知れません。よし附いて來て戴けるにしても多分石ころの多い道を引ずり廻す樣なことになるだらうと思ひます。甚だ御氣の毒ですが今晩御出になつた因果と諦めて御許しを願ひます。

其處で愈〻御話ですが、何を話さうかと考へてゐる中に不圖日外夏目先生からきいた話を思出しました。先生は滿洲の方に旅行して方々から演說を賴まれる苦しさに、或處で何故演說が出來ないかの理由を演說した事があつたと云つて笑つてゐられた事がありましたが、私も亦何故自分は演說が嫌ひだか其理由を述べて出鱈目の一つのパラグラフにしやうと思ふのであります。併し其前に一寸先日讀んだ或本のことを御話する方が便利でありますから、其本のことを述べて、もう一つ前のパラグラフに致します。

其本と云ふのは伊太利の哲學者 Benedetto Croce の Aesthetic であります。實は御話する積りで讀んだのではありませんし、繰返して要領を摘んでゐる暇がありませんでしたから、正確の點に於いても周匝の點に於

いても隨分缺けてゐることと存じますが、ほんの序論ですから大樣に御聽流しを願ひます。一體クローチエの美學は其哲學のシステムの第一卷なのださうで、其中の大部分は人間の活動(Activity)一般の論に涉つてゐるのであります。クローチエの考によれば人間のアクテイヴテイは次の四つに分類することが出來、人間のアクテイヴテイズは次の四つに盡されてゐるのであります。

- Activities
  - Theoretic
    - Aesthetic
    - Intellective
  - Practical
    - Economic
    - Moral

美的活動は直覺(インテユイシヨン)を以て世界を知る處の知識(ナーレッヂ)であり、理論的活動は概念(コンセプト)を以て世界を認識する處の知識(ナーレッヂ)であります、兩者は知的(セオレテイック)な點に於いて一致して、直覺と概念とに於いて對立するのであります。又經濟的活動は人間の慾望(デザイヤ)そのものゝ滿足を求め、道德的活動は或合理的目的——言葉ははつきり覺えてゐませんが、意味は大體かう云ふ意味と記憶します——と結合したる慾望の滿足を求めるものであつて、兩者共に實踐的なる點に於いて一致し、道德的活動がプラス・アルファ(+α)なる點に於いて兩者は相異するのであります、此二大別四小別の關係は相互的(レシプロカル)ではなく、遞次にそれ〴〵の基礎をなしてゐる。詳言すれば知的活動によつて寫象上の基礎を與へられることなしに實踐的活動は成立し得ないし、セ

オレチツクの内でもエスセテイツクの直覺なしにインテレクティヴの概念は成立せず、實踐的の方面でも經濟的活動は知的活動の兩方面を、道德的活動は前三者の一切を豫想せずには成立しないのであります。人間一切の活動が果して此四つで總括し得るかは隨分疑問ですし、殊に美的活動を知的の中に專屬せしめるが如きは甚だ異論のあることと思はれますが、兎に角クローチエはさう考へて明快に人生を分類してゐるのであります。

其處で問題は此等のアクテイヴテイズの一つなる美的活動に歸つて來るのでありますが、美的活動は前にも云つた通り直覺によつて世界を認識するのである、直覺とは概念が物と物との關係をユニヴーサルに認識する（從つて其活動は「定義」に至つて完成する）に反して、物當體をインデイヴデュアルに認知するのである、さうして吾人が事物を直覺するに際しては精神（スピリット）の活動が其間に作用して、精神（スピリット）は其事物に自分の特性を印刻するのであります。スピリットの特性を印刻されることによつて直覺の內容は精神的になるのであります。即ち一切の「印象（インプレッション）」は——必ずしも感覺的のものに限らず——直覺されることによつて「形式（フオーム）」を得るのであつて、直覺によつて印象に形式を與へることをクローチエは特に表現（エツキスプレッション）と呼ぶのであります。一切の藝術は要するに此意味の表現に外ならない。藝術即表現、表現即藝術であつて、表現のある處には常に藝術あり、藝術は表現以外の地には何處にも存在し得ないのであります。さうして美醜の

區別は唯表現の完全にのみデペンドするのであります。其處で次の等式は成立する——

Aesthetic＝Intuitive＝Form-giving＝Expressive＝Artistic＝Beautiful.

即ち如何なる内容(印象)も表現せられたる限りに於いては形式をとる、形式をさへとれば如何なる印象と雖も美的たるを妨げない。クローチエの美學は此意味に於いて徹底的に形式論(フォマリズム)であります。

今クローチエの美學を私の目的の便宜の爲に使用するには前に述べた表現の概念を更に三つの方向に敷衍して置く必要を感じます。第一に表現は利用的(ユーティリタリヤン)の價値と截然たる區劃を持つてゐます。藝術の價値は表現其物の完全不完全に在つて、表現の内容の有用無用に關係しません。如何に有用なる内容も其表現の失敗せる限り藝術的に醜であり、如何に無用なる内容も其表現の完全なる限り美であります。故に道德は藝術固有の範圍には容喙する資格を持つてゐないのであります。クローチエは或處で次の樣な列證を用ゐてゐます。其例證によれば、虛言者は虛言者たる其人格を完全に表現することによつて藝術的美に到達することが出來るのであります、此の如き藝術的表現によつて其人格に一種の補ひをすることが出來るのであります。

第二に表現其物として美的價値を有するのだから、必ずしも其内容となる印象の、感覺的と云ふ意味に於ける具象性(コンクリートネツス)を要しない譯であります。表現の内容が外界の感覺的印象であつても、内界の感情的經驗であ

つても、表現の表現たる點に於いては何の變りもないのであります。實に概念其物にさへ常に直覺的の一面があり、概念其物が藝術的表現の內容となることを得るのであります。表現の意味を此の如く解すれば凡ての論文（エッセー）は勿論、凡ての思想の書、凡ての科學の書が一樣に藝術品としての一面を有することになります。凡ての哲學者科學者は概念の取扱に於いて理論的（インテレクチュアル）の人として優劣を有すると共に、其概念の表現に於いて藝術家としての優劣を持つてゐるのであります。

第三に表現の特質は印象にスピリットの形を刻印することにあり、藝術は唯表現を其本質とするのでありますから、藝術の本質は全然精神的のもので物質的のものではないのであります。從つて藝術を內術品と外術品と、心の中の藝術と感覺的存在を與へられたる藝術とに區別するは無意味であります。詩人や小說家が紙に向つてインキを瀝すと云ふ物質的の方法によつて其製作を仕上げるのは唯物質的活動をば精神に於いて表現を完成する爲の方便として用ゐてゐるに過ぎません。紙に書くことは唯精神のコンセントレーションを完くする爲めの器械的方便であります。紙に書くといふ物質的の事件と共に吾人の精神には表現と云ふ事業が鮮かに力强く行はれる。本質的の意味は唯精神に於ける表現の完成以外にはないのであります。

これ丈でクローチエの美學の御紹介は了つたことに致します。其他クローチエは表現せられたるものは凡て美なりと云ふ原理を振翳して印象

の美的價値を實驗的に決定せむとする實驗美學を一笑に附し去り、表現に種類の別を作り、美的直覺の世界の內部に理論的概念による分類を輸入せむとする企の顚倒を指摘して、藝術分類論、美的範疇(崇高悲壯滑稽等の分類)論を愚弄し、盛んに四方八方を薙ぎ倒してゐますが、之は隨分議論のあることで、美學專門家でなければ餘り興味のあることでもなし、第一此處では必要のないことですから凡て省略することとして、唯以上の事丈を申上げて次のパラグラフに移ります。

2

クローチエの美學の英譯者はクローチエを讚美する爲にショーペンハワーの言葉を引用してゐます。即ち其言によれば、ショーペンハワーは書く人に三種あつて、第一は考へずに書く人、第二は書き乍ら考へる人、第三は考へて後に書く人だと云ふことであります。今此言葉を私の場合に應用して云へば、私は神樣の眼から見れば考へずに書く人であるかも知れないけれども、自分で此事を承認するのはいやですから第一種の人ではないことにして置きます。併し私はどうも第三種の人を以て自任する丈の自信がない。實際私の忙しく、惶しい生活はイマジネーションの成熟を俟つて書く丈の餘裕を與へて呉れません。私の評價に從へば私は第二種の人——書き乍ら考へる人、話し乍ら考へる人であります。クローチエの美學を借用すれば書き乍ら、話し乍ら表現の仕事を仕上げて行く人であります。と

ころが皆様の顔は私のコンセントレーションを援けないばかりか、私のコンセントレーションを破壞するの効能を持つてゐます。人の顔を見て物を云ふことは私の言葉に油が乘ると云ふ効果を齎さないのみか、私は徒にドギマギして私の言葉のマスタリーを失つて了ひます。從つて聽衆を前に置いて藝術を製作する時、私の表現は散漫になり、辻褄が合はぬ樣になり、内なる統一と活氣とを失ふ樣になります。これ私が演說をすることを厭がる所以でありまして、假令やつても失敗した——醜い表現に終る所以であります。

併し私の演說を厭ふ理由はこればかりではありません。それにはもう少し深い根底があります。即ちそれは私の表現の内容——心の世界そのものゝ性質によるのであります。私の言ひ現さうとする所は、他人に頒ち、他人を說き伏せ、自分と同樣の光りを他人にも享有せしめやうとする樣な輝いた世界ではありません。私はそんな美しい、輝いた世界を持つてゐません。私の表現せむとする處はクローチエの例にとつた虛言者の世界と聊か相通ずる處のある暗い恥かしい世界であります。私は表現の衝動に驅られて逡巡しながら此世界を明るみに驅り出すのであります。私が何物かを表現しやうとする時には此暗い世界が他の一切を排除する程の直接性を以て其頭を擡げるのであります。併し私は此世界を自分の誇とする事が出來ないだけに、此を表現するに當つて之を見聞する第三者——公衆を豫想することは極りが惡い、苦痛である。之を自分に示すの

さへも極りが悪いけれども、自分と自分とは流石に永らく顔を向き合つて生きて來ただけに心易い。私は唯自分自身を對手にして始めて自分の内の世界を表現することが出來るのであります。私は實際自分の書いてゐる處を人に見られることを好まないし、自分の書いた物の人に讀れることも好まない。假令新聞や雜誌に出したものでも、君の書いたものを讀んだと云はれたり、其評判を聞かされたりすると赤面する。私は自分の物を書く時に讀者の顔を思ひ出すに堪へないものであります。どうせ書けば何かに出るに極つてゐるのに、私は眼に浮んで來る讀者の顔を打消し打消しすることに努めて、始めて心を落付けて筆を進めることが出來るものであります。甚だ尾籠な譬喩ですが私は自分の書いた物を公表するプロセッスをば、私の腸から排出したものを汚穢屋が來て持つて行くと同じ樣に考へることを好みます。私をして私の書いたものを公表させるものは主として新聞雜誌記者の親切と私自身の貧乏であります。尤も一旦公表した以上は流石に一種の反應を要求する心はある。併し一體私の書くものは私自身の極めて限られたる内界の表現でありますから、唯私と共通の心持を持ち、共通のインプレッションを持つてゐる極めて少數の人にアッピールするだけで、其以外の讀者をば始めから豫想しません。其以外の人に讀まれることは私は絶對的に嫌ひであります。又假令共通の心を持つてゐる人であつても、例へば親しい友達であつても、口に出して彼是云はれることは大嫌ひです。他人の批評は大抵の場合要求しもしな

ければ、假令之をきいても重きを置きません。私の求める反應は唯戀人同士の様に顔を赧らめることゝ、眼と眼とを見合せて微笑することによつて通ずる反應と領解とであります。こんな心持で表現と云ふ仕事をしてゐる者が、皆様の前で演說するなどは抑々間違つた次第であります。併しそんなことを云ひ乍ら皆様の前に最も恥かしい表現をして了つたのは滑稽であります。人前も憚らずにこんな個人的告白をして了つたのは誠にすみませんでした。これで此パラグラフは終りと致します。

3

私は更に進んで私の心の内の世界に一種の表現を與へて見たいと思ふ。表現せむとする内容は私の胸の中の一つの蟠りであります。私の胸の中には常に何か知ら暗い蟠りがある。私は此蟠りに一面の表現を與へて見たいと思ふのであります。私は嘗て「實驗と經驗」(收めて「影と聲」に在り)と云ふ題目の話で、同じ蟠りに一面の表現を與へたことがあつたが、今は之と重複する點を可成避けて、他の方面から此問題に觸れて見たいと思ふのであります。そこで私の茲に掲げる題目はKultur und Instinktと云ふ名ばかりは非常に大きいものでありますが、固より私は此大問題に對してあらゆる局面を盡した客觀的の解釋を與へむとする者ではありません。主觀的な、一面的な、ほんの一小部分の問題に觸れるだけであります。さうして此兩者——文明と本能——が私の問題となるのは固よりデイレンマとしてであります。兩者をデイレンマとして受取るのは私の心

の中の經驗と云ふより外別に根據の指定の仕樣もありません。私は私の心の中でルーソー以來の（若くはルーソー以前千餘年の）問題に衝當つてゐることを感ずる丈であります。

皆樣も御存じの如く獨逸に Ueberkultur といふ言葉があります。教養過度とでも譯しませうか。若しイーバークルツールと云ふ言葉が單にクルツールの分量が多過ぎると云ふだけの意味ならば、私などは元々クルツールの多い人間ではありませんから、此言葉に當らないこと勿論でありますが、若し之が又方向を誤つたクルツールをも意味するならば、私は自分を名けてイーバークルツールを持つてゐると云ふのに何の差支もない樣に思はれます。恐らくは皆樣の中でもイーバークルツールに苦んでゐられる方が少くないでせう。私の心の中では文明がイーバークルツールの意味で、本能とのディレンマを形造つてゐるのであります。

其處で文明が私から奪ひ去つたものはよく考へたら色々ありませうが、今私の頭に浮ぶ限りに於いて重要なるものが二つある。其一は Einheit（統一）で其二は Kraft（力）であります。兩者を引くるめて Konzentration（集中）と云つてもいゝかも知れません。此等のものは本能的生活には多量に惠まれてゐる處であつて、假令之を意識することなくとも事實として持つてゐること、少くとも此等の缺乏の意識によつて惱まされてゐないことは確かであります。或種の文明人（クルツールメンシュ）――稱贊して云ふのではありません――は本能的生活に何で統一があるものかと云ふかも知れませんが、そ

れは前の刹那と後の刹那とを衝合はして外部から論理的に見出し得る統一であつて、瞬間々々の經驗に於いては統一せられたる全人格のエネルギーを以て其時々の經驗に衝當つて行くのが本能的生活の特色だと見ることは決して間違つてゐないと思ひます。さうして私のコンセントレーションの觀念中に含ましめむとする統一はやがて此意味の內部的人格的統一に外ならないのであります。他の點は兎に角として、少くとも此意味に於いて文明は吾人の本能生活からコンセントレーションを奪ひました。そうして其代りに Zerstreutheit(散漫)と云ふ難有くないものを持つて來ました。少くとも此點に於いて文明は呪ふ可きものであつて、本能的生活は欽慕すべきものであります。さうして私の現在の着眼點は主として此點に懸るのですから、私の此問題に對する態度が、其限りに於いて文明の脫離本能の恢復と云ふことにあるのはやむを得ません。兎に角私はツエルシトロイトハイトを與へる限りに於いて文明に遠かり、コンツエントラチオンを與へる限りに於いて本能の强健を得たいのであります。

其處で文明が吾々に齎す分裂と薄弱を叙述するのが順序となりますが、色々の方面に涉つて之を描く事は今夜の私の根氣と時間とが許しません。それで文明の一代表者として概念と本能生活との交涉を考へて見たいと思ひます。概念を文明の一代表者とすることに就いては異論もありませうが、概念が本能生活の要求から直接に生れて來たと云ふよりも寧ろ文明から生れて、文明と同じ樣に本能に對置される傾向を持つてゐ

ることは爭はれないと思ひます。少くとも私の胸に此蟠りを作り、私をして此問題に衝當らせた特殊の文明に於いて、概念が上述の如き役目を勤めてゐる以上は、現在の問題に當つて概念を文明の一代表者とすることは間違ひでなからうと存じます。

概念からの釋放を求めむとする努力は既に夙くから哲學の方にも現れてゐると思ひます。手近い例をとれば近頃流行のベルグソンの哲學の如きも亦此例に洩れますまい。即ちベルグソンの考によればインテレクトはライフのプロセッス中に生ずる一現象に過ぎない。概念は固體を模型として構成されたる、便宜上の所產に過ぎない。Direct vision of life を得むと欲する者は――端的に生を見むと欲する者は、インテレクトを補充し、之を超越する新しい立場を求めなければならない。ライフの過程中に生じ來れるインテレクトを唯一の便りにしてライフ其者の全體觀を得むとするは誤謬である。とかう云ふのであります。併し私は今ライフの全體觀を求める爲に概念の專權の煩しさから脫れむとするのではありません。此樣な個我を離れた、全局に涉る、哲學問題に全心を注ぎ込むには私の心は餘りに卑く、餘りにセルフイッシュであります。私は唯實際生活に及ぼす概念の影響によつて實際の困難に遭遇してゐるのであります。さうして此困難を脫する途に就いて思ひ惑つてゐるのであります。

實際生活との交涉によつて問題に上つて來る概念は固より主として倫理上の概念であります。詰り吾々の倫理上の概念が、吾々の友達と交り、

男と女と、親と子と相携へて生活して行くプラクテイカル・ライフの上に暗い影を投げるやうな感じがする、其感じを如何にすべきかと云ふ疑問であります。概念的の要求が旺盛で、吾々の實際生活にも力強く干渉する時に、其概念が吾々の個々の要求、刹那々々の經驗、本能の憧憬を十分に悅服させる樣なものならば固より論はないけれども、之が本能生活の要求と矛盾して、而も其服從を强請する樣な場合には、此等の概念は人生の Fluency を害し、男らしい、生々した發展を妨げ、其結果として人生の萎縮を齎すのであります。固よりそれは概念其物が惡いのではない。概念は色々の經驗や要求を纏めて之に統一を與ふ可き性質のものであつて、眞正に人生の全局を統合するに足る樣な生きたる概念ならば決して人生のフルエンシイを害することがない筈であるが、悲しいことには今の世にはそんな倫理的概念がありさうにもない。存在するものは唯部分的外面的統一の用にのみ適する概念の破片、概念の屍骸のみであります。若くは與へられざるが故に益々旺盛なる概念的要求のみであります。さうして概念の破片、概念の屍骸、內容の空しき概念的要求は人生を暗くし、人生を硬くし、人生を萎縮せしめるに十分なのであります。現在の特殊の文明に向つて提出せられた問題として、誰か概念と實際生活との矛盾を否定することが出來ませう。若し出來るとすれば其人は此矛盾を感得するの力なき痴呆か概念の名を藉りて本能に仕へる僞善者のみでありませう。

話が餘り一般的にならないやうに、カントのKategorischer Imperativをとりませう。之は恐くは倫理的概念の中の最も崇高なものであつて、同時に私共の胸の中に生々と活きてゐるものであります。カントの無上命令の意味は、皆様もよく御存じの如く、汝の意志の決定を總ての人の意志決定の標準として差支のないものであらしめよと云ふことであります。此無上命令によつて凡ての人が少くとも其性情に潜む一つの主要なる傾向の圖星を指されてゐることは疑がありません。併し此無上命令を正直に遵奉しやうとすれば、吾々の實際生活は矛盾と矛盾との鉢合せとなつて到底やりきれるものではないと思ひます。今日の文明今日の生活を殆んど根本的に顚倒するに非れば此無上命令に從ふ生活は實現が出來ないだらうと思ひます。例を兩性生活にとれば、カントの無上命令に從つて異性を取扱つてゐる男が世界の何處にありませう。行爲の表面は兎に角、無上命令の精神に從つて意志決定をしてゐる「息子」と「夫」とが世界の何處にありませう。男の女に對する戀は多くの場合に於いてエゴイズムであります。征服の歡喜であります。さうして女の戀の一意專念ならむことを要求してゐながら、自分は更に新しい戀を夢見てゐる人も決して少くはありますまい。女に對して貞操を守らない男は果して女に向つて貞操を要求しないでせうか。女の本性が貞操を守ることを幸福とすると云ふことは茲の問題ではありません。自分の貞操を守らぬ男性が女性に向つて貞操を要求する點に於いて既に無上命令に背反してゐるのです。吾々

は女から受けることを欲しない所を以て女に臨んでゐるのであります。此の如き生活はカントの無上命令の前に面を蔽ふて狐鼠々々と恥づ可き存在を續けるか、若くは無上命令を反撥して、新しい立脚地から自分のエゴイズムをジャスティフアイしなければならないと思ひます。

私がかう云ふのは決してカントの無上命令を持出して現今の生活法を非難する意味ばかりではありません。吾々の心の經驗の豐富なる世界、吾々の生活に對する歡喜と進歩とは其エゴイズムを許容して之を行く處迄行かしめる爲に、從つてカントの無上命令と矛盾する方向をとるが爲に、始めて可能となる點も決して少くないと思ひます。「罪」によつて始めて開かれる新しい經驗と價値との世界があることは眼がある以上は決して否定することが出來ないと思ひます。我等は何故此世界を開いてはいけないのでせう。何故偶然の過失若くは罪過が此世界を開いて呉れる迄手を拱して見てゐなければならぬのでせう。此新しい世界に進擊して之を攫取することが若し許されるものとすれば吾々がカントの無上命令に從ふ爲に進む處迄進まずに濟まして了ふのは却て新しい道德に不忠實なものではなからうか。ニイチエの弟子なる我が一つの心はかう囁きます私の非難するのは此新しい道德——從つてカントの無上命令の否定——ではありません。唯曖昧な妥協であります。無上命令を胡魔化して其眼を竊むことであります。

此の如くにして私の心には概念と本能と、更に適切に云へば概念に味

方する道德と本能に味方する道德との矛盾を生じます。そうして概念に味方する道德は私の本能を制肘し、本能の最大の長所なる强さと統一とを奪つて私の生活を分離させ、又弱くします。カントの無上命令は寧ろ今日の文明を顚覆する力として其根據を更に深き人類の直覺に據るてゐるに拘らず、又カントの無上命令其物には決して人の心を弱くする必然性を持つてゐないに拘らず、現在の關係に於いては私の心に虛弱（シュワッハハイト）を齎すものとして作用してゐます。さうして其限りに於いて文明の一代表者として私の生活を暗くし、重苦くしてゐるのであります。

最も此矛盾の解決は遙かの彼方に豫感（アーネン）することが出來ないでもありません。それは無上命令の內容にエゴイズムを注ぎ込んで了ふのでありま

す。即ち吾人が他人を道具として、方便として、エゴイズムの手段として取扱ふことを恥ぢないと共に、他人が吾々を道具として、方便として、其人のエゴイスムの手段として取扱ふことを當然と考へるのであります。つまり自分を投出して了ふのであります。かうすれば萬事は相互の間に許されて、無上命令は其形式を保つことになるのであります。此場合には無上命令はエゴイズムの中にヒロイズムを吹込むものとして、之を高める要素として働き出すのであります。此處に於いて我々の生活は非常に危險な、非常に自由な、非常に勇ましい、非常に寂しい、併し氣の引締る樣な生活となるのであります。併し之は私の頭がアーネンするだけであつて、之を唯一の解決とも思つてゐませんし、私が實際此世界に進入してゐる

譯では無論ありません。從つて無上命令は依然として私の心の錘りであります。そうして此錘の結果として私の心の中の本能の强健が損はれるのですから、現在の觀察點に於いて本能生活の味方をするのはやむを得ないことであります。

概念の話はこれ位にして問題は又文明と本能との一般的關係に歸ります。吾々がかくの如く文明によつて分たれ、弱められ、散らされたと云ふ恨を抱く以上、現在の文明ならぬものに吾等が行く可き道の Vorbild を求めるのは當然の心理的歸結であります。さうして其のフォルビルトが本にの煩されぬ狀態即ちプリミテイヴの狀態、若くは過去の或文明の狀態於い能て求められるのも亦自然の結果であります。此處に原始主義、復古主義の心理的根據があるのであつて、此等のものは大體インステインクトに對するクルツールの回顧と解することが出來ると思ひます。吾々が現在の文明に於いて統一と力と集中との缺乏を感ずる以上、之を過去若くは原始時代に回顧して、文明自身の養分としやうとするのは、如何にも理解し得べき、同情し得べきサイコロヂイであります。此サイコロヂイに於いてはモンテーヌもルーソーと握手し、トルストイもニイチエと相通じ、「ノアノア」の著者ゴーガンさへ其一臠を分つ處であります。之を單なる保守主義として嗤ふのは人間心理の理解が足りないからでありませう。

勿論かう云ふのは日本現在の保守黨に味方する意味ではありません。彼等は第一に弱め、惱す文明の寰外に自分を置く點に於いて眞正に「文明

の惱み」を理解する者でないことを證明して居ります。彼等は唯自分の身の周りに、自分の存在に都合のよい空氣を拵へて置かうとする、淺薄な、懶惰な、狡猾なエゴイストに過ぎません。從つて其回顧も昔は御米が安かつたと云ふ樣な一通りの、外部的な Kulturzustand に止つてゐるのであります。之に反して眞正の復古主義者は第一に文明を內的に心理的にしなければいけません。第二に此內的文明を自分自身の中に經驗して其苦みを嘗めなければなりません。若し次の樣な造語を許されるならば彼の問題は偏に Bewusstseinszustand に懸らなければならないのです。文明と本能との苦しい戰爭の戰場として自分自身の胸を提供しなければならないのです。

併し原始主義復古主義のサイコロヂイを理解し同情すると云つても、其理解と同情とを此の樣にして表現することは要するに Artistic Expression に止つて、現實の狀態をば寸毫も動かすことが出來ない譯であります。虛言者が其人格を表現することによつて其虛言者的人格を改造し得ないと等しく、文明と本能との矛盾に苦む心持を茲に表現しても其爲に吾々の本能が强くなる譯ではありません。然るに私の問題は實際上の問題であります。狀態の改造を求める問題であります。從つて單に Artistic Expression を與へるだけでは滿足することが出來ません。併し之をプラクテイカルの問題として見る時、私は皆樣の前に提出す可き何等の解答を持つてゐないものであります。私は唯皆樣の前に純粹な問題提供者と

して立つてゐるのであります。さうして此提供は一方に於いて皆様のプラクテイカル・アッテイチウドに訴へる所以でありますが、一方に於いては一種のアーテイステイック・エッキスプレッションとして存在の理由を缺いてゐないと思ひます。

速記者の速記を參考として自分の演說を自分で筆記したのである。從つて此處には速記の誤謬がないと共に新しく補つた處もないではない。併し大體に於いて十一月某日の演說筆記で新に稿を起したのではない。新に稿を起すのならばもつと書きたいことが澤山ある。

（大正元年十二月十二日夜）

附錄

若きゴォホ

1

後印象派の畫家ヰンツェント・ファン・ゴォホ(Vincent van Gogh)の物語である。彼にとつて世界は惱ましき迄に色彩と光輝と生命とを以て溢れてゐた。彼の描いた檜樹(サイプレス)は大なる炎の塔の樣に天に聳えて中空を燒かむとしてゐる。彼の視神經は過度の緊張によつて損はれ、彼の精神は遂に生命の充溢に堪へずして狂つた。玆に語らむとするは未だ畫家とならざる若きゴォホである。四度其天才に適せざる職業の間に迷ひ、四度傷いて自

己の寂寞に歸れる彷徨のゴォホである。其妹クェスネの「ヴィンツェントの思出」(Quesne van Gogh, Persönliche Erinnerungen an Vincent van Gogh. München. 1911)と、マックス・アイスラーの紹介(Die neue Rundschau. Feb. 1911)とを參照して此稿を草する。

北ブラバント(和蘭)のGroot-Zündert村に、多くの窓と暗綠色のヱネチヤ格子とを以てしつらはれた——連綿として數代に亘る正しき人々によつて住み古された——一軒の古風な家があつた。家は綺麗に手入の屆いた庭の中に建つてゐた。庭の花壇にはレセダや、にほひあらせいとうや、日が翳つてもまだ炎の色に眞紅に燃えてゐるゼラニウムの花などが、暑い八月の午後を、濕りが欲しさうに咲き亂れてゐた。花壇の後の草原は雪白の布の晒し場として其下滴に濡れて輝いた。草原の奥には莓の花が匂ひ、庭を限る山毛欅の生牆の內側には、豌豆の莖が山の樣に積み重ねられて、莖の間には半ば乾枯びて殘つてゐる幾許かの莢も見えた。生牆の外の豐饒なブラバント野にはライ麥の畠が眼路の限り續いて、遠くなるに從つて畠と草地との境界も朧に交つて見えた。野には一筋の小川が流れて、雪の樣に白い橋が其上に架渡された。川の岸には勿忘草や薔薇色の鶯花(シユワーンブルーメン)などが咲いた。

三人の兄妹——九つと十二になる女の子と、十三になる男の子と——は豌豆莖の山を攀登つたり轉落たりして嬉戲してゐた。其處に十七になる長兄が現れた。彼は弟妹の傍を無言の儘に過ぎ、庭の扉を開けて畔道

に出た。其手に持つ瓶と魚網とを見送つて、三人の弟妹は彼等の兄が河沿に歩いて行くことを知つた。併し「兄さん、私も一處に行つちやァいけない？」と問ふ者は一人もなかつた。

彼の體は縱に長いと云ふよりも寧ろ横に肥つてゐた。其脊筋は常に俯向き勝な習慣の結果として少し屈んでゐた。赤味の勝つたブロンドの髪を短く刈つた上に麥藁帽を被つて、其下から異樣な——どの點から見ても少年らしくない——顏が覗いてゐた。其額には既に少し皺があつた。其眉毛は高く突出した額骨の上に、深き沈思を示す八の字を寄せてゐた。小さく、落ち凹んだ眼は、外來の印象が變化するにつれて、或は蒼となり、或は綠を帶びた。併し此の如く美しからぬ外貌の中にも、既に內界の深味がまがふ方なく現れてゐた。

之こそ若きポンツェントの姿であつた。彼は夏休の爲に寄宿學校から家に歸つて來たのである。彼は偶々家に歸つても、弟妹と嬉戲することを求めずして、唯一人ゐることを求めた。彼は其弟妹をも、彼自らをも、彼自らの若さをも、關り知らぬ者に對する樣な無頓着さを以て之を取扱つた。

彼は又村落を避けた。村は眞直な街道に沿ふて時代後れの家が建續いてゐた。眼鏡を鼻の先に乘せた神信心な婆樣達は、其家の窓掛越しにポンツェントの通る姿を覗いた。昔は相應に榮えた白耳義境の村も、驛を廢されてからは死んだ樣にひそりと寂れてゐた。彼は此村路を避けて獨り

野邊川邊の小徑細路を彷徨ひ、珍らしい花の咲く場所は悉く之を熟知してゐた。鳥や甲蟲の棲家を尋ねて其自然の生態を覗き廻る面白さに日の暮れるのも忘れ勝であつた。彼は麥畑に落る雲雀を見て其塒を知り、麥を踏荒さずに密かに其塒に忍び寄ることを知つてゐた。又水棲動物を捕へるに妙を得て、よく之を標本に拵へては、一つ〳〵に札をつけて之に拉丁語の名前を書いた。彼の弟妹は長兄の博物に詳しいことに驚嘆し、又其採集の手腕の優れたことを尊敬した。併し彼等はヰンツェントの採つて來たものを時偶に見せて貰ふ位に止つて之に馴れ親まうとはしなかつた。彼等は小兒の敏感を持つて長兄の孤獨を愛することを知り、其邪魔を仕樣とはしなかつたのである。

此の如くにして自然は百千の聲を以て彼に囁き、彼の魂は專心に其囁に耳を傾けた。耳を傾けるのが唯一の興味であつて、之を描き現さうとする希望は未だ其胸に萠さなかつた。極幼少の時分粘土で象を作つて可なり寫生が旨く行つたこともあつたし、八つの時林檎の樹に駈上る猫を描いて母親を驚かしたこともあつたが、こんなことは極めて稀な出來事で、兩親さへも後年になつて漸く想起す位の處であつた。當時の繪はゴォホ家にも一枚も殘つてゐないと云ふことである。彼は唯自然に對する感激を深く胸に疊み込んで、自ら知らざる間に後年の準備をなしてゐたのである。

2

寄宿學校の時代は過ぎた。彼は校長の祝福を齎して家に歸つた。ヰンツェントは家例によつて商人とならなければならなかつた。

彼はグービル美術店の見習となつた。グービルは世界的の美術商であつた。伯林、紐育、倫敦にも巴里の本店と同名の商店を有し、其外にハーグ、ブリュッセル等にも支店を持つてゐた。彼は初めハーグに居り、次にブリュッセルに移り、更に巴里に轉じた。彼の仕事は荷解き荷造りの類から、寫眞や銅版に覆ひをかけることなどであつた。彼は此等の仕事を叮嚀に、巧に、喜んでやつた。纖細なる手工に堪能なるは彼の如く粗野なる外貌を有する者に似合はしからぬ程であつた。彼は嘗て甲蟲の標本を製した

る時の如く、又後年病者の看護、外傷の繃帶に天成の技倆を發揮したる時の如く、今美術品の取扱に其腕を現した。彼は聊かも厭な顏をせずに、自分の學力と讀書量に比して隨分低過ぎる此仕事に從事した。殊に美術通となる機會ある事は彼の樂とする處であつた。グービルの大間屋には各流各派の繪畫及び其複製が集り且つ散じた。嘗て自然崇拜に沈湎したる彼の心は今自然模倣、自然再現の權威を認めて之を喜とする樣になつた。併し自分の心臟に自然の俤を疊み込んでゐる此批評家は時流の褒貶毀譽に同意することが出來なかつた。彼の價値ありとする物が世人に持囃されないのは、彼の驚きでもあり彼の嘆きでもあつた。彼が逡巡し乍ら其意見を打明けた時に、番頭の一人は「皆樣の御好きなのが即ち流行です」と

答へた。彼には此言葉が呑込めなかつた。彼は番頭さんではなかつた。流行とは貧弱の別名である。彼は一躍してコンヂションの外に出で、コンヂンションを輕蔑することを學んだ。彼は孤獨なる者の言語、グービル商店中の廉價な、不捌けな商品の言語を理解して其味方となつた——結果は平俗な破滅である。彼の兩親は同じ日に二通の手紙を受取つた。一通は巴里のヂンツェントが其給料の一部分をクリスマスの贈物として弟妹に送つて寄越したものであつた。彼の兩親は、家に在つてはあんなに孤獨を求めて、人に親まなかつたヂンツェントが、遠方に在つて其詐りなき好意を寄せて來たのを喜んだ。他の一通は同じく巴里のグービルから來たものであつた。其手紙には、ヂンツェントは始めハーグ及びブリュッセルに於いて可なり有望に思はれたが、彼の陰氣と無愛相とは美術商の資格に遠く、特に巴里の客には最も不向であつて、美術通を誇とする巴里の婦人などは「和蘭の田舍者」と口を利くのは厭だと言明する有樣である、從て若しゴォホ家との關係さへなかつたから、既に解雇になる筈であるが、或は英吉利氣質には適するかも知れないから、倫敦に轉勤させる、と書いてあつた。此手紙は兩親にとつて青天の霹靂であつた。然るに六週間後ヂンツェントから再び手紙が來た、彼は倫敦の大番頭と口論の末、遂に卒直大膽に自分の意見を言明した。商賣は貪婪である、貪婪は態のいゝ窃盗であると彼は斷言した。其結果として彼は永久に解雇された。「併し御兩親樣には御心配下さいますな、一ヶ月分の給料を餘計に受取つた上

に、新しい地位は求めて既に與へられましたから」と、かうであつた。

3

所謂求めて與へられたる職業は、下級の牧師が多數の家族を養ふ補助とする爲に創めた寄宿學校に於て、佛蘭西語を敎へると云ふことであつた。併し其實已むを得ずして轉げ込んだ此職業が、彼の天分に適してゐなかつたことは、今更驚くにも當らない。

家に在つては沈默勝であつたヰンツェントも旅から家に送る手紙には雄辯であつた。彼は多くを書き、多くのことに就いて書いた。彼の文體は發作的、飛躍的であつて、平滑ではなかつた。彼は輪廓的一般的のことから筆を轉じて觀照的具象的の叙述に移り、街頭市井の情景を描くに人心を誘致する畫家的筆致を以てして、而も常に此等の光景を故郷の此處彼處と比較することを忘れなかつた。時には又數條の線を以てする略圖を添へて圖解することもあつた。後年に至つても、彼は自分の製作に關する消息を書く時にはペンを以てせる略圖を添へる習慣があつたのである。

彼の新しき寓居は倫敦の近郊に在つた。牧師は丈の高い、痩せぎすの、惡意のなさゝうな、貧にやつれた男であつた。彼の顏色は古き聖者の木像の如く煤けてゐた。主婦は靜かな、柔かな女であつた。其眼は三月の菫の如く靑かつた。此夫婦は薔薇とクレマティスとを以て圍まれた其古

い、灰色の家に、二十人の少年を寄宿させてゐた。彼等は十一から十七迄の少年であつたが、皆痩せた、青い、若さを知らぬ者共であつた。學校の模様はディッケンスの小説其儘であつた。其生徒はチャップマン・アンド・ホール版にある挿畫から拔出たやうな姿であつた――ボンツェントは此事を其手紙に書いた。

彼は生徒から輕蔑嘲笑の的とされる樣なことはなかつた。彼は「デボッド・カッパーフィールド」のミスター・メルにはならなかつた。生徒の中多少でも生氣のある者で彼の和蘭の話――山なき國、流れ多き國、ガリヴー旅行記中の大人國の玩具の樣な可愛らしい家と町との國の物語――に牽引されぬ者はなかつた。併し彼は課業に適しなかつた。彼の生々たる天才は日々同じ事を繰返す規則的な平凡な生活に堪へなかつた。

生徒の親元は最下級の倫敦商人であつた。捨賣の肉屋、古着屋、靴屋等は小兒の健康を案ずる爲に、若くは五月蠅い餓鬼を手許から放す爲に、寄宿費の豫算をも碌々立てずに、其子弟を此寄宿學校に送つた。從つて其學費には滯納不納が多かつた。校長は此の如き生徒を退學させる前に、自ら父兄の家を廻つて金の催促に歩いた。

無能なる助教師は此名譽ある集金掛りを拜命した。彼は倫敦の地圖と番地書きとをポッケットに捻ぢ込み、僅かに事足る丈の旅費を當てがはれて倫敦廻りに出掛けた。債務者は不意の襲擊に逢つて逃げ隱れをする暇がなかつた。全權大使は其主人よりも多額の金錢を集めることに成効し

た。彼の歴訪したるは倫敦最低の裏店ではなかつた。それにも關らず生存競爭は人の身體を侵蝕し、其背筋を曲げ、其顏を歪めた。彼が後のブラバント時代に書いた「馬鈴薯を食ふ人」の顏が此等の倫敦人の悲哀を傳へてゐないとは誰が云ひ得やう。

牧師は第一回の成功を喜ぶことが出來た。第二回の集金旅行は全然失敗であつた。債務者はヰンツェントの姿を見て集金に來たことを知つた。彼等は借金の言譯に其困苦と絶望とを訴へた。空氣の腐りたる灰色の衢をトボ〳〵と行く人、其處には肉體の苦と精神の惱みとが形なき悲しき影の如く新しき命を損ひ、親は何の慰めもなく其日の終局に急ぎ、子は一度も眞正の若さを知らずして萎びたる老人じみたる顏を世界に晒す衢—

—此等の呪はれたる存在を見て若き和蘭人の心臟からは血が流れ出た。彼は金を集めに來た事を忘れた。彼は空しき財囊と憂愁に充てる心臟とを齎して家に歸つた。併し彼が其見聞したる處を主人に報告せむとした時に、主人は其言葉を遮つて唯「錢は、錢は」と訊いた。而して集金旅行の失敗を聞くや、激怒して直ちに彼を追ひ出した。

破れたる靴と失はれたる前途とを以て彼は兩親の家に歸つた。

兩親の失望は大きかつた。其憂慮は更に大きかつた。

併し彼等は唯彼の「下手」(其母の言葉に從へば)が此等一切の失敗の原因であることを熟知してゐた。

4

幸にしてドルドレヒトの一書肆に彼の新しき地位は見出された。彼の讀書力と彼の語學の才とは彼を此地位に薦むるに十分であつた。その職業は益々彼を讀書家とした。彼の主人は其徒弟の學識を認めて、貴重なる書類の閲讀を許した。彼の讀書には性格があつた。其嗜好は次第にカーライル、ディッケンス、ビーチャー・ストー、トーマス・ア・ケンピス、ジャン・ファン・ペールス及びソロモンの箴言等に向つた。此等の讀書は深く其精神を支配して、彼の聯想は屢々此等諸家の文章の上に走つた。

併し更に活潑に彼の精神に作用したものは美術であつた。アリー・シェッフェルの名を負ふ博物館は彼の言葉なき教場となつた。アリー・シェッフェル及びヨゼフ・イスラエル等の作は強く彼の驚嘆の情を動かした。千八百八十二年に彼がイスラエルの「二人の友」に就いて其弟に書き送つた手紙はよく美術家並に人間としてのゴォホを現してゐる——

「一人の老人が——若し彼を漁師でないと假定すれば、彼はカーライルでなければならぬ。彼はカーライル獨得の哲學者的頭顱を持つてゐる——一人の老人が小舍の爐邊に腰をかけてゐる。泥炭の小片は黄昏の中に燃えてゐる。老人の坐する處は暗い小舍である、小さい窓を一つ切つて、白い小切れの窓掛をかけた古い小舍である。彼と共に老を迎へた一匹の犬が其傍に蹲つてゐる——二つの老いたる者が互に眼と眼とを凝視する、犬と人とが互に眼と眼とを凝視する。老人はヅボンから煙草入を取出し

てパイプに煙草をつめる――黄昏の中で煙草をつめる。黄昏、靜寂、二つの老いたる者人と犬との孤獨、兩者の默解、老人の沈思、此外には何もない。彼は何事を考へてゐる？――私にはわからない――私は言ふことが出來ない。併しそれは深い、長い思出でなければならぬ。或事が、私が知らぬ或事が、遠い過去から浮び上つてゐるのである――恐くは But the thoughts of youth are long long thoughts と云ふ句で終る有名な詩を思はせる此或事が、彼の顏にあの表情を(物悲しい、落付いた、謙虛な表情を)與へてゐるのである。私はイスラエルの此畫をミレーの「死と樵夫」の對として見たいと思ふ。イスラエルの此畫と並べて見る可きものはミレーのあの繪の外にはない。私の想像は更に進んでイスラエルの畫をミレーの繪の側に置いて相互に補充させるといふ抑へ難き衝動を感ずる。私は思ふ、イスラエルの繪に缺けたることは唯「死と樵夫」が之と密接して掛けられなければならぬと云ふことである。長い狹い室の一端に甲を掛け、他端に乙を掛ける――此室内には他の如何なる繪も許されない。許さるゝは唯此二つ許りである」。――イスラエル自身の言によれば老人は漁師でなくて牧羊者である、牧羊者と見た方が犬との配合が生きて來ると云ふことである。併し其事は今どうでもよい。自己の藝術と對角線的反對をなす藝術に對してゴォホが如何なる味解と感情とを有するかを示す點に於いて此手紙以上有力なドキュメントは滅多にあるまいと思はれる。

最後に深く彼の精神に印象したるものは昔乍らの光景を保つ古き和蘭

の都會であつた。其或街道に立つて、或一定の地點から街衢を見通せば、三百年前の俤が其儘に保たれてゐるのを見ることが出來た。特に彼を牽引したるは廣き河の眺めであつた。彼の室は此河に臨んでゐた。河の面は風と嵐と日光と曇天と、反映するものゝ變ずるに從つて常に其色を變へた。波の上には木造の舟や其他種々に彩られた船舶が往來した。河の兩岸には綠なる野が遠く開けて、遙かの彼方には聳ゆる塔も見えた。此等の風景に對して畫家の心は彼の胸に燃えた。併しそれは未だ豐富なる形像を以て彼の胸中を充たしたに止つて、彼をして畫筆をとらしめるには至らなかつた。とは云へ一度勇氣と才能との熟するや、僅か十年の間に他人の一生に價する程の作品を殘すことが出來たのは、久しく胸裏に蓄へられたる此等の印象が迸出したものと見なければならない。

5

彼はドルドレヒトに於いて一人の學識ある法敎師と親密になつた。法敎師は此の如き洞察と精神的眼光とを有する非凡の青年を深く學問をさせずに捨てゝ置くことを惜しんで之を其兩親に忠告した。玆に於いて老いたるゴォホはアムステルダムの船渠に奉職する兄弟に相談して、ヰンツェントが試驗準備をする間、室と食料とを供給して貰ふことにした。叔父は嚴格な規則的な人であつたが、其甥には何の干涉をも試みなかつた。ヰンツェントは博學なる猶太人に就いて拉丁語と希臘語とを學び、數月に

して之を善くするに至つた。併し過度の勉强は彼の安眠を害し、更に非常なる神經の興奮を來した。彼は最も好んで慘憺たる貧民街を訪ひ、時には其處に終日を暮すこともあつた。彼は又興奮の極その銀時計と手套とを慈善箱に投入したこともあつた。彼は日曜毎に六つ若くは七つの敎會に赴き、時には猶太人の會堂に迄行つて其禮拜を學んだ。鄕里に送る彼の手紙は――其數は非常に多かつた、甚しきは一日に二回に及ぶこともあつた――次第に異常を呈して父母の心を惱ました。遂に再び父母の落膽す可き時は來た。彼は突然試驗を斷念して直ちに說敎者の職に就く可き由を申送つた。彼は其手紙に「私は此の上の躊躇を棄てゝ福音を宣べ傳へる者になる樣に召されてゐることを感じます。基督自身が私に模範を與へて下さいました。彼は曾てパリサイの徒やサドカイの徒の中に在つて學校に學ばれました。弟子達や使徒達も同樣でした云々」と書いた。

彼は英吉利にある時、鑛夫に對する傳道に就いて多くのことを聞いた。殊にディッケンスの小說は暗黑と危險との中に勞働する人々に對する彼の同情を高めた。彼は遂に其獻身の決心を告げて、白耳義のボリナージに送られることになつた。ボリナージは石炭坑の多い地方であつた。從つて福音の必要も亦至大であつた。併し費用が足りない爲に小さい木造の敎會を建てる譯にも行かなかつたのである。

父母は澁々乍ら此計畫に贊成した。彼等は其長男の爲に多額の金錢をも心配してやらなければならなかつた。併し金錢の苦勞がわかる樣な非

ンツェントではなかつた。失望せる父母は其子を僻遠の地に送る爲に一切の必要品を整へてやつた。母はヰンツェントの衣服調度に母の愛を縫ひ込めて、我兒の旅立の準備をした。

鑛夫の風態は非常なる烈しさを以て彼の心を動かした。彼等は痩せ衰へ、風雨に侵蝕され、天日の下に勞働する者の活氣と生色とは到底何處にも見ることが出來なかつた。婦女は汚れたる着物を着て、塵と煤とを防がんが爲に黑布を以て其髪を覆ふた。彼等は殆んど悉く影が薄く、醜く、且つ年よりも老けて見えた。ヰンツェントは土地の上流に位する、唯一軒しかないパン屋の一室に其根據を据ゑた。

彼の說敎に集る者はパン屋の一家徒弟を始めとして、少數の鑛夫も亦其列に加はつた。彼等は勝手に出席したり缺席したりした。彼の說敎には說敎者の態度があつた。彼の言語は平易にして人の肺腑を衝く處があつた。彼の言葉は外敎者をも不快にする樣なことはなかつた。其說敎は肉體の過勞に疲れたる精神に滋養を與ふるに足るものであつた。

併し要するに彼は說敎者ではなかつた。說敎者は何時の間にか負傷者の看護人に變つてゐた。彼は此の點に就いて天成の技倆と、婦人にも劣らぬ程の優しさとを持つてゐた。不幸にして此技倆を大に振はなければならぬ時が幾許もなく襲來した。冬の半ばになつて恐ろしきチブスの流行が此黑き國に始つた。老いたるも幼きも皆之を免れることが出來なかつた。ゴォホは自分の食費を悉く惱める者に施し、自らは家具さへもない虛

しい小舍の中に住んで、衣服も其他のものも皆病者に與へ、日夜彼等を看護して病牀の側を離れなかつた。バン屋の上さんはギンツェントの母に手紙を書いた。此の手紙が故郷に着いたのは例によつて遲かつた。兩親は上さんの美しい、圓味のある文字と自然な文章とを通じてギンツェントの危險に臨んでゐることを知つた。上さんの手紙には「妾も子供を持つてゐる母でございますから、御兩親樣に御子樣のことを御知らせ致します皆樣は無事で妾の家にゐると許り思つてゐらつしやるのでせう」とあつた。兩親は暫く默つて相對座した。「明日俺が行つて連れて來やう、それが一番いゝ」と暫くして父が云つた。母の答へは唯優しく柔かなる握手であつた。

凡てが事實であつた。父は汚い小舍の中に藁の囊を床とし、短衣を夜具とした其子を見た。彼は缺乏と不眠との爲に痩せ衰へて、家に歸るのを拒む力もなかつた。バン屋の長男は此父子の爲に送別の祈禱會を開いた。鑛夫達も亦會衆の中に交つた。飢と惱との爲に精盡きたる鑛夫達は仲間の挨拶を聽く爲に傾聽の姿勢をとつた。釣ランプは彼等の異形なる影を白い壁の上に投げた。父と子とは長く此日を忘れなかつた。

彷徨の時代、準備の時代は茲に盡きる。天才は之から其正路に就く。

（明治四十五年五月十一日）

ゴーホの藝術

（マイヤー・グレーフエの「ゴーホ」による）

アングル、シヤッセリオー、ピユヰー・ド・シヤヴンヌ、モーリス・ドニーを基礎とする樣式的理想派(Die Stilisierende Richtung)は要するに印象派に代る丈の力がなかつた。十九世紀後半三分の一の大美術に特色を與へるものは「本能の自由」である、マネーの理想なる「現代」(Contemporanéité)である。然るに彼等は主義として傳統の形式に據るが爲に、假令種々の現代的要素を取入れては居ても、到底妥協の痕を蔽ふことが出來なかつた。

結果は兎に角として理論上印象派の反動として起り來る可き流派は印象派の內部から來たものでなければならなかつた。分解を誘ふ精神が直ちに綜合に導く樣なものでなければならなかつた。

此の如き傾向はゴーガンによつて一種の流派として形成されたが、此精神に最も自由な、最も健全な、最も力强い表現を與へた者はファン、ゴーホであつた。固よりゴーホが外國人であると云ふ事實は——假令和蘭と佛蘭西とは繪畫の上で常に離る可らざる姉妹であつたとは云へ——此表現に特殊の性質を與へた。ゴーホの性質は始からポピユラリテイに緣のないものであつた。彼の畫は啻に賣れない許りではなく、彼は始めから賣らうとする努力の無効なことを悟つて奇麗に之を諦め、而も此諦めの

爲に何の苦い顏もせずに却て純なる喜びを得た。彼は其製作を自分と精神を等しくする少數の人に贈り、自分の製作に自分の全存在とシックリ適合する姿を與へることを以て滿足してゐた。彼の評判は一度も公衆の口に上らなかつた。世間が彼を研究し始める頃には彼はもう遠に死んだ人であつた。而も其後の十年間、彼の名を口にする者は純然文學者の側に止つて、美術家は與らなかつた。此大美術家の理解の爲に其途を拓いた功績は Mercure de France 及び其一團に歸しなければならぬ。之に比べれば近年ゴーホは隨分迅速に獨逸を征服した。

千八百五十三年ゴーホは牧師の子として和蘭の田舍に生れた。彼は其友ゴーガンと等しく成年の後始めて畫家となつたのであつた。其前に彼は四度他の職業の間に迷つて四度兩親悲嘆の種を蒔いた。最後の職業は實に輝いたものとなつたが、之さへ彼の人格の一切の方面を盡した解決と云ふよりも、寧ろ彼の人格の衣と呼ぶ可きものに過ぎなかつた。とは云へ彼は皮相の徒が信ずるよりも遙かに眞面目に藝術に從事した。第一歩に骨の折れた事は無類であつた。最初は才能の有無さへ疑問であつた。彼は輕い形式的な表現の能力を持合せることが少かつた。併し彼には意志と頭とがあつた、自らを強くする途を理解する魂があつた、英雄的な緊張力があつた。——一切の生れ附の器用さにも增して最も天才の存在を保證する緊張力があつた。

千九百八十年代の始彼は Mauve を最初の師とした。Mauve はゴーホと

は全然別世界の人であつた。彼は人よりも藝術家、藝術家よりも技藝家であつた。ゴーホの此人から受けた影響は全く外部的に過ぎなかつた。當時の彼に影響する點に於いては寧ろ Mesdag, Maris 並びに和蘭風景畫の偉大なる刺戟者コンステーブルの方が有力であつたが、此時代のゴーホの畫は要するに實に無趣味な下らないものばかりであつた。ゴーホがゴーホとなるには更に廣い基礎を要する。同時代の大家は彼を啓發するに足らなかつた。彼は其弟にして同時に最良の友なるテオドールから玩具の樣な小さい畫室をハーグに建て貰つた。彼は此處で十七世紀の偉大なる和蘭畫家を師として其遺作を研究した。

普通の說に據ればゴーホは一切を其性情に負ふてゐる、彼が特定の畫風に從つたのは偶然の機會である、彼は無意識に此偶然に一身を托したのであると云ふ。併し事實は此說の正反對である。彼の發展は極めて迅速であつたが、彼は此短い間に、古代美術から發生し來れる近世藝術の生ひ立をば一身の中に繰返した。其發展は好運であつた、併し決して偶然ではなかつた。ゴーホは大なる勞苦によつて其進步を獲得したのである。彼の繪畫に赴いた最初の動機は熱せる實感を洩す爲のディレッタントらしい試であつた。其次に彼は古の大家に沈潛し、更に彼等を通じて近代の偉大なる先蹤に到達した。かくて始めて最後に獨自の形式を攫むに至つたのである。彼の十年の藝術的生涯の中には短い乍らも顯著なる三段の準備時代がある。古い大家の研究は即ち其第二段であつて、ファン・ゴー

ホを全然新しい人にする丈の力があつた。彼の努力はレデュースされたパレットを以て古い靜物畫の色調(トーン)的價値を暗示する點に在つた。意外にも彼は此試みに成効した。其最良なものは一切對色を使はない、濁つた、土色がゝつた灰褐色の靜物である。其運動は同じ色の一高一低と、極めて落付いた、大家らしい筆觸とのみから成立つてゐる。趣味(ゲシュマック)が——後年のゴーホの大膽なる描法に於いても其「力」に品位を與へる用を爲してゐる「趣味」が——此場合では藝術を支へる唯一のものである。其趣味は頗る分化せる、而も折衷の臭味なき趣味であつた。或る特殊の古人を想起せしめる爲には、其働き方(エッフェクト)が餘りに純一であつた。其靜物畫では馬鈴薯が花やかな果物の代役をする。馬鈴薯は此上もなく卒直に淺い籠の中に置かれるか、若くは積み重ねられる。卓の上には謙遜な黃銅器が置かれて、其靜かな光が灰褐色の根本色調を明るくする。人は此中に一切の芝居を避けやうとする目論見を讀むことが出來る。古の大家の何人もこれ程無我に描き、これ程部分的色彩と部分的形體に對する未練を斷絶して描いた人はあるまい。それにも拘らず畫面全體の上には Ostade や Aert van der Neer 等の精神が漂つてゐる處を見れば、如何にゴーホが精神を古大家の研究に集中したか、如何に彼の追隨(アップヘンギヒカイト)が精神的のものであつたかが想見されるのである。

此段のファン、ゴーホは——眞正の藝術家ゴーホは之を始とするのであるが——古代式の畫家であつた。材料の美に沈湎せる靜觀的の叙情詩家

であつた。之に反して近代的ゴーホは劇詩人である。最初には劇詩人が抒情詩人の敵として現れた。推察する處ゴーホは最良の意味に於いて傳習的な形を描いてゐる間に、時々電火の如く閃き來る神與に對して（彼の藝術は此神與に從ふだけの力がなかつた）不安を感じたであらう。既に此時代に於いて火と燃ゆる日輪のモテイフ（彼は之を以て其憧憬を具體化せむと試みた）が「劇の魔」の樣に其抒情詩中に現れて、全體の藝術的効果を害してゐるものがある。最良なる靜物畫と失敗の太陽——此處にデユアリズムがあることは爭はれない。如何に彼が此デユアリズムを征服し、如何に其性情と强烈なるパトスの愛好とを馴致して美に奉仕せしめ、如何に渾沌を化して統一ある形式を創造したか、此は近代美術史の短き而も光輝ある一章である。此事業を完成した力は偶然でもない。顧慮を解せざる野人の獸性でもない。又天才の妄想でもない。唯特色ある人格の自己敎養である。

彼が千八百八十四年乃至五年に（靜物畫と同時代に）ブラバントの村落 Nuenen で描いた農夫生活の繪は、彼の思想生活の要求に適ふ樣な對象の上に彼の獲得した技倆を應用せむとした者であつた。此試みは或程度迄「馬鈴薯を食ふ人」に於いて成功した。此繪は此時代の最も有名な、最も注目す可き、併し最良とは許し難き製作である。此處には靜物畫の消化された美がない代りに又風景畫の多數に見る樣な無形式な象徵主義も亦現れてゐない。それは矛盾する二つの方面の妥協から成立つてゐる。感

覺が眞實な爲に、此妥協は人としての一面を低くする樣な結果を齎してゐない。鑑賞する者は、畫家が身を畫中の人物の地位に置いて、見すぼらしい室內の沈默せる晩食の光景を叙述してゐることを――從つて之に果敢なき挿話(エピソード)以上の意義を置てゐることを感ずる。認識の根强さは畫家を類型(タイプ)の構成に驅り、事件に就いて鮮かなる形象を描かしめるに十分であつた。ミレーの「種蒔く人」は勞働の慘苦を知る人であつた、併し彼は又收穫を確信する人であつた。然るにゴーホの農夫には此確信の背光がない。彼等は自然界の最下級者である。自ら耕す土を嚙つて生きる人である。其姿には明かにボリナージの鑛夫の記憶が滲み出てゐる。而も薄穢い暗靑及褐色の色調は更に悽慘の印象を高める。併し此悽慘は全局の藝術的解決を濁して之を生の儘の範圍に放置して了つた。固より此繪には樣式(スタイル)を缺かない、同じ方向に走る强い線は觀者に快感を與へてゐる。併し其樣式は未だ豐富を缺き、多樣を缺き、比較的に外的にして、或意味から云へば傾向的修辭的たるを免れない。其効果は精々人を驚かすことに過ぎないのである。

併し彼は此に滿足する人ではなかつた。彼は既に獲得した處を捨てゝ、更に始から出直すことを躊躇しなかつた。固よりアントエルプのアカデミーに於ける短い月日は彼を其處迄推進めることが出來なかつた。彼に缺けたる處は、彼の如く過去と現在の中間に立つて、而も調和の道を發見した先蹤――自己を或傳統に屬する者と觀じて、而も之を特殊の方向に

發展せしむることの可能なるを發見した先蹤――を求めて之に從ふことであつた。此爲にはミレーの感化は餘り特殊に過ぎて、却つて彼を其末流（エピゴーネン）にして了はなければやまなかつた。ミレーの感化は常に彼を素描に驅つた。而も色彩畫を解せぬ素描家には固より何の發展も許されなかつた。八十年代初半の素描は大低才能ある素人の水準以上に出でない。孰れの素描にも形式を求めむとする試みはあつた。動作は數條の線を以て構成された。併し其線は必要なものを盡して了ふに先つて樣式の型に篏められた爲に、生きて働くことが出來なかつた。最初のハーグ時代に描いた "Sorrow" と題する裸體婦人は形式の缺乏を表情的姿勢によつて補はふと試みたもので、素描の貧弱を暴露して近代の墮落せる挿繪を見る樣な感じを起させるものであつた。併し Nüenen 時代の農夫の素描は既に素人臭味を脱してゐた。彼は農夫の運動を研究して其主なる輪廓を注視した。而も純粹の線のみを以て對象を描くに滿足せずして、之に陰影を附けた。此はコンスタンタン、ムーニエの樣な素描家の終生脱するを得なかつた遣り口である。凡て眼に見える物を光と陰影との原始的對立に約することは、要するに「眞らしさ」を以て滿足するものであつて、而も其貧弱の中には既に過分の疣贅が含まれてゐる。此遣り口とそれから運動を表す廉價なる抽象的形式とによつて「馬鈴薯を食ふ人」の類型は成立するのである。要するに此繪はミレーによつて體を與へられた影繪に過ぎない。而も先蹤（プオルビルト）の單純化に非ずして粗大化（フエルグレーベルング）に過ぎない。唯大なる色彩

畫家ゴーホとして始めて彼はミレーに接近し、ミレーに一歩を進めることが出來るのである。Nüenen ではなくアールズで。木炭ではなく火の如く燃える色彩で。

ファン・ゴーホは色彩を要した。物質を畫く方便としての色彩に非ずしてゴーホ固有の本質に形式を具備せしめる爲の徹底的系統的な仕上げを要した。彼は强い線と大きい面とを追求した。彼に殘れるは唯兩者を無條件的な必然として了ふことであつた。千八百八十六年彼は遂に眞正の敎場を得た。彼は遂に巴里に出たのである。

優秀な人の發展は何時でも不斷の分解と綜合とである。一つの階段に於いて其組織に緊密であつた部分は一度粉碎されて再び新局面の一成分となり、遂に局面と人格とが一致し、一切の部分に夫々の大なる價値を附與する「形式」が出來上る迄此過程を反覆する。巴里に於いてゴーホが經驗した分解は彼にとつて同時に苦痛であり又歡喜であつた。和蘭の田舍に生れた彼は今大都會の壓迫に惱んだ。

佛蘭西の近代美術は主成分に對する酸の樣に彼の上に働いた。彼の魂は本來其故國の古大家に屬してゐた。レンブラント、フェルメール、ポッター及び其他の風景畫家は彼の熟知する處であつた。和蘭畫家に對する理解の透徹せる點に於いてゴーホの書翰以上に出る者は少い。彼は畫家とならずして精到なる鑑賞者に了るの危險に臨んでゐた。然るに今佛蘭西の美術界は彼に示すにドゥラクロアを以てした。曾てゴーホはアール

ズに於いて、二十五の年にドゥラクロア及び其徒に接するを得なかつた不幸を嘆いた。併し若し彼の希望が事實となつてゐたならば結果は恐くは今日の如くなるを得なかつたであらう。彼が佛蘭西風を征服し得たのは和蘭畫風の中に可なりの成熟を遂げてゐたからである。幸福なる混化には強く深き民族的意識を要する。人は受容する前に先づ自ら所有する必要がある。

ドゥラクロアは最好の機會を選んでゴーホの前に現れた。彼はゴーホと共に深い熱情を持つてゐた。彼はゴーホの望んで得なかつた「感情表現の直截」を見せた。彼は又烈火の如き性情の醗酵と確固たる意識の賢さとが如何に相互に結合し得るかを示した。メデヤの畫家の用ゐた手段(メディウム)は色彩であつた。其色は天才の衝動性を具備したものであつた。赤と綠と青とは猛火の川の如くドゥラクロアの畫布の上に渦卷いた。それは一見唯原始的な力から生れた、恐怖と恍惚とから溢れ出でた、刹那の子であつた。而もそれは同時に最良の系統によつて畫布を灌漑する樣に拵へられた、堅固を極めた運河でもあつた。此種の色をゴーホは此大家から學んだのであつた。冷靜な繪畫上の術語を用ゐればゴーホは唯色彩(コロリスティク)を以て色調(トーン)に代へたのである。色彩と色調との對立は單にテクニーク上の問題に止らず、其根底は深く人間の本質に基いてゐる。ゴーホの樣な人は此處に民族及び文明の差別を見ない譯に行かなかつた。此調和し難い二つの者を面前に据ゑて其統一を計る必要を感じた時、彼は魂を失つた人の樣にさ

へ自らを考へたであらう。彼は故國のそれより百倍も力强い事を表現し得べき言語を聞いた。併し自分には其一言も通用しないことを認めなければならなかつた。兎に角革新は彼にとつて避く可らざるものとなつた。

目標に到達する道を發見することは其必要を認識することよりも困難であつた。單に褐色や灰色の代りに單色をパレットの上に置く丈では新しい道は得られない。純一な、力强い「形式」――彼の最後の理想は非常に複雜な發展の階段を經なければ到達し難かつた。新しい國語を學ぶ學生が先づ文法から始める樣に、ゴーホは先づ骨の折れる分析から始めた。彼は既に多くのことを學んで來た爲に、一面には初步の練習が馬鹿らしくなつて一足飛に進まうとする危險があつた。一方には成熟してゐる爲に修得し易い點もあつた。彼は此時代にエミール・ベルナール及びゴーガンと知合になつた。三人は共通の目標を眼の前に据ゑて居た。彼等は自分達の前に既にドゥラクロアとの相談を試みた印象派の人達があることを見た。大なる材能と少からざる理智とを以て開かれた途があることを見た。

求むる途は此處に與へられた。最初の間此途を進むことはゴーホにとつて甚だ困難であつた。併し幾許もなく其進步は目醒しいものとなつた。繪畫として見るに足る可き彼の最初の風景畫にはゴーガンの影響が明かであつたが、直に彼等の畫風は分離した。彼の風景畫はスウラーの派に屬するものと見られた。日本の平面的裝飾畫に對する熱愛も亦其痕を殘

した。併し彼はレンブラント及びハルッの同國人として長く平坦な刷毛遣に滿足することが出來なかつた。彼の「面」(フレッヘ)は一畫より一畫に進む毎に活躍して來た。描線の鋭利と色彩の光輝と空氣描寫の微細とは彼の風景畫に驚く可き精彩を與へた。巴里時代最良の作に於いて、ゴーホは幸福な、靜かな、日の光を浴びた少年の樣に見えた。モネーよりはシスレーに似た、純然たる抒情詩人であつた。彼は風景畫の外に靜物及び肖像を描いた。此處では強い線と強い色とが密接に融合して、何の媒介をも要せぬ樣になつてゐた。併し此時代の製作の或者には未だ象徵主義的傾向が遊離して存在し、或者には又色彩の堅實が缺けてゐた。要するに彼は他人が十年に經驗する處を數ヶ月に經驗した。從つて種々の傾向が暴風雨の如く彼の上に荒れた。彼が巴里に居たのは滿二年にも足らない。併し彼は和蘭派の一畫家として巴里に來り、あらゆる偉大な繪畫の秘密を握つた人として、大なる藝術品を作るだけの成長を遂げた人として巴里を去つた。彼の成長を事實として喚出すには唯外部的の機會を要するのみであつた。

最後の局面——ゴーホの最偉大な局面——は一切の對象を自然の純粹な現象に採つた。巴里は灼熱する感覺に生きる人ゴーホに節度を敎へた。彼の選んだ土地は南であつた。彼の選んだ對象は依然として農夫であつた。彼は此處に巴里で學んだ處を實現した。「部分」は太陽の灼熱の下に凡て一つに融け、一つに汗ばんだ。——凡ての天才は世界と自己との接觸に

よつて成長する。彼は都會の與ふる一切を吸收し保留し、極めて迅速に極めて强烈に經驗し得る限りを經驗して、然る後に孤獨の境に身を置き、獨り自然の前に其自己を披瀝する。ドゥラクロアの樣にブールヴールに留る者も、ゴーガンの樣にタヒティに彷徨ふ者も、セザンヌの樣に村夫子になる者も、ゴーホの樣に農夫に赴く者も、彼等は凡て其生涯の最も偉大なる局面に於いては孤獨である。何物をも外部よりせずして一切を內部より經驗する。外界は唯同一主題の間に變化を喚起する機會に過ぎない。

ゴーホは又此新しい故郷に於いて其運命に捉へられた。彼の祖先は靜かなる街と運河との温和な空氣の中に其繪畫の奇蹟を行つて來た。然るに彼等の子にとつて祖先の用ゐ盡した土地は餘りに狹かつた。創造の愛は群衆と共にする幸福を粉碎して了つた。彼は再び新しき境界標を建る爲に世界を探つた。而してその故郷と正反對なものが彼の征服衝動を刺戟した。彼はプロヴンスのアヽルズに——佛蘭西の驚異の國に赴いた。其處では太陽が大地に純粹の色を與へ、人と物とは今猶羅馬人が角技場を建てた時の如く素直に大らかに見えた。斯る國に於いて、藝術の姿は恰も南國の言語の如く輕く快く、其莊麗の裏には快く温められた四肢の投げ遣りらしい呼吸が動いてゐた。北方の堅苦しさも、ゴシック時代から近代に至る迄の繪畫を彩つてゐる峻しさも——乃至何等の戲曲的集中も凡て其影がなく、北方に於いては霧を劈く叫となつて消える悲劇も、此處では猶柔かな節奏の中に自らを融かした。

此國に來てゴーホの興奮は非常であつた。彼はフランツ・ハルツの猛烈を以て、又レンブラントの最も暗い調子をも猶炎の如く燃え上らしめたあの力を以て、貪るが如く此國の輝き渡る花かさを描いた。火を以て火に向ふのである。彼は始めて南に來た北國人の樣に劇しき轉心を經驗し、心の奥に渦卷く物を外部に放射し、彼の胸を重くしつゝ而も彼の身を保護し來つた一切のわたかまりを抛擲した。燃え盡すは自然の結果であつた。自明の結論として滅盡を豫想するが故に悲壯である。終局に急ぐ人の悲しき運命の物語にも拘らず美しい。不幸なる人々の絶叫の上に火炎の中から立騰つて觀者の眼を魅し去る榮光(グローリー)の如くに崇高である。

凡ての大なる藝術品は光榮ある戰爭の後の記念碑である。之を通じて輝くものは無數の要素の汚穢と矛盾とを貫いて遂に花と咲いた魂の神祕である。アールズ時代のゴーホの作品には戰爭が一層明瞭に、往々耳を聾する爆聲を以て、燃燒する。燃燒する天空の下に彼の繪も亦炎となつた。終生を通じて、沒頭する以上によき事を知らなかつた一人の人の熱情は茲に手を延して掴むを得るものとしての美に面接した。製作、製作——「日光の灼熱の中にありて、沈默して唯收穫のことのみを思ふ刈手のやうに、早く、早く、早く、さうして急いで」(Schaffen, Schaffen —, Schnell, schnell, schnell und in Hast, wie der Schnitter, der schweigend in der Sonnenglut nur an das Mähen denkt" — Brief.)

彼の繪は描いたのではない、衝き出したのである。アールズ時代に於

ける――千八百八十八年の二月から九年の五月迄の――製作は數百に上つてゐるであらう。ゴーティエがドゥラクロアに就いて、彼は頭に太陽を、胸に颱風を宿してゐたと云つたことは文字通りにゴーホに當嵌る。彼の描く處を見るのは恐ろしかつた。彼は血を撒く樣に繪の具を振り撒いた。彼は描く時に自己を忘れた、彼は自己と對象との合一を感じた。彼は燃え立つ雲――其奥には千の太陽が大地の粉碎を脅してゐる雲の中に、恐怖に溢れて天に向つて叫ぶ樹の中に、平原の恐る可き廣さの中に、自己自身を描いた。

固より之が單に痙攣的な感覺を叙するに過ぎなかつたならば、一切は結局無に等しいであらう。併し此等の繪に現れた恐ろしき者は、其最も狂暴な咆哮に當つても猶美しさを失はぬ水と云ふ元素の作用にも比す可きものであつた。難船者を嚇す激浪も猶神の如き曲線を描き、恐怖に溢れて甲板に嚙り付く難船者の顏も海水の亂舞と調和を保つ樣に、自然に向ふ心の痙攣的發作から來るゴーホの繪に於いても、斷片的な部分は色と線との共鳴を示し、作者の興奮は唯運動の强さと形體の堅實及び卒直を表示してゐるに過ぎない。野性は直ちにデコレーションとなつた。

ゴーホの作は一つの繪の中に其多數を見ることが出來る。彼の筆觸は單に事物を描くに止らずして、物と物とを互に親み互に戯れさせる。同時に背景に神祕なる生命を與へて、その前に鮮かなる輪廓を描いて浮び出す事物に異常の美しさを與へる。此の如き効果を齎すものは特殊なる

筆觸の構造である。筆觸は近世の繪畫を原始時代のそれと區別する一つの特色であつて、現代の畫家は大低其藝術全體の基礎を此處に置いてゐる。併しゴーホの繪畫に於いて筆觸は特別に重大に、特別に決定的である。彼は其先輩よりも更に深き自覺を以て、スーラーの如く總括的(シエマーティッシュ)に、併し更に豐富なる變化を以て之を樣式化(ステイリジーレン)した。而して重心を色に集注した。觀者の眼に實體的の錯覺を起させる樣な努力は、彼にとつて此上もなく無頓着なことであつた。其繪はゴブランの如く常に平面に止つてゐた。而も織物を以ては到底及び難い程に豐富であつた。而も亦其豐富は自然の如く作用する程に有機的であつた。彼の色は金(ブロイシッシュ)、青(ブラウ)と、純粹の黃から橙黃迄の間と、輝綠(スマラクトグリユーン)及エロナ綠と、それに赤と——五指を以て數へ盡すことが出來るものであつた。併し彼は此等の色を以て最も危險なる結合をも敢てした。キラ〳〵明るい金青を最も柔かなる赤の傍に置く樣なことを敢てした。併し彼は其分量を擇ぶことを誤らなかつた爲に——例之、前に述べた樣な兩色の配合を圍むに黃と深綠の色調の適當なる容積を以てした爲に——最も大膽な事は最も自然な事として現れた。青は常に黃の傍に、輝ける赤は常に橙黃の傍に置かれた。アールズの羅馬人墓地の並木を描いたアギオン處藏の繪は實に驚嘆す可き實例を示してゐる。前景に青く浮ぶ二列の大木の並木は遠くパースペクティヴによつて狹められた純黃色の空の中に融け入つてゐる。此並木の間を河は赤の調子を帶びた橙黃色に流れ逝つて行く。かくて大地には深き血紅色の笑が形成

される。此繪に對する者は殆んど色彩と色彩とが其形體を現して巨人的鬪爭を演じてゐることを感ずるであらう。實に一切現代の色彩論の比較的眞理に過ぎざることを悟り、色彩容積の分量的配列に關する法則の究め難きことを明かにせむとする者は先づゴーホを見なければならぬ。猶彼の色彩の不可思議を實現せる他の二つの例として、茲には唯彼がドゥラクロアの原畫に倣つて描いた「善良なるサマリヤ人」と、彼のアールズ時代の傑作にして最もよく裝飾的傾向を現した「峽間」の二畫の名目を擧げるに止めて置く。

併しゴーホの特色を最も徹底的に明かにする時に、彼の限界も亦甚だ鮮かに浮んで來ることはやむを得ない。晩年の繪畫の多數にはシエーマが餘り露骨に露れてゐる爲に、觀者は强い線と色との魔力の罅隙から空虛の感情が覗いてゐることを感ぜぬ譯に行かない。之をルノアールの女の顏やマネーの花等に比べれば、此二大藝術家はゴーホに比して更に豐富な僞土を持ち、吾人の本質の更に深き方面に滿足を與へてゐることを悟るであらう。彼等の樣式は抑揚の豐かな言語である。彼等は感覺を自由に選擇して之を再現するに何の拘束をも感じない。之に較べればゴーホの樣式は孤獨なる者の手製である。其基礎は比較的貧しきコンヱンションの上に立つてゐる。彼の領分は繪畫の最極端なる末梢に近づいて既に裝飾の領分を犯してゐる。併し乍ら彼は貧しいけれども飽迄も眞實であつた。彼の妥協は——若し妥協と云ふことが出來るならば——飽迄も

純一なる人が其理想に適合する唯一無二の形式を求むる惱み多き憧憬であつた。思想の形骸ではなかつた。清純なる本能の抑壓でもなかつた。今日の樣式的理想派をゴーホと比べれば、假令彼等の中の最良なる者を持つて來てさへ、彼は忽ち彼等の追隨を許さぬ程高い者となつて了ふのである。特に最も驚く可きは全然裝飾的に作用する繪畫に於いても、自然に對する直接の關係が保たれてゐることである。一見色とアラベスクとの配合以外何物もない樣に見える製作に於いても藝術家の人格的眼光が常に强く材料を貫いて現れてゐることである。ゴーホの製作の或物は彼の偉大なる先輩の製作に比べれば往々萠芽(ルディメント)の觀をなすに過ぎないけれども、其繪の根底を爲す純一なる本能の力は一切の缺點を蓋ふて强く吾人をひきずつて行くのである。

ゴーホの藝術が比較的に一面的であつたのは、「人」としての彼が、藝術を方便と解して唯一の目的とは解しなかつた事實に基いてゐる。既に此理由によつて彼の藝術を彼の狂氣の所爲に歸するの不當なことがわかる。彼の最良の藝術が生れた時に彼の「人」が既に狂氣であつたと云ふ事實は、彼の藝術にとつて、ドウラクロアが胃病に惱み、ゼリコーが跛であつた以上の意義を持つてゐない。狂氣が彼の「人」を規定してゐることは自明である。其狂氣は異常なる緊張集注の結果であつた。併し此理由を以て「藝術家」の狂氣を論定せむとするは宗教畫の作者を信仰家とし犯罪を描く者を惡人とすると同樣のノンセンスである。「藝術家」の健全を知らむとする

者は精神病院時代の彼の手紙を讀め。彼は普通の人が其肉體的症狀を叙述すると同樣の明晰を以て其病狀を叙し、同時に嘗て藝術に關して書かれたる思想の中最も深きものゝ一に屬す可き彼の藝術觀を發展させたのである。

ゴーホの思想は初から深い社會主義であつた。固より社會主義と云つてもそれは例の狹隘な空論ではなく、美しい魂の感ずる赤裸々の事實――自らを人に與へること――に外ならなかつた。一擧手一投足にも自己の本能に從つて動いて來たゴーホと云ふ個性が、藝術家の爲我名譽の慾とは全然交渉なき精神に從つて製作したと云ふことは此上もなく注目す可き事實である。彼が少年の時に美術商とならうとしたのは商人の本能に驅られた譯ではなかつた。唯美しい物と其作者との間に生きて、彼等の爲に多少なりとも力を藉し、公衆の盲いたる眼を開いて人類の祝福に與らしめる爲であつた。其後敎師となり說敎者となつたのも同一精神の更に深入した表現に外ならなかつた。

此の生ひ立は完成せる畫家を理解する爲にも亦除外して考へることが出來ない。彼は今も猶昔の如く、自らを他に與へむと希ふ人であつた。彼の生涯は恰も現代全般に涉るエゴイズムを拆伏する爲に自分の身を捨てゝ見せた唯一人のやうなものであつた。――丁度遠い昔から物語に傳つて來た彼の偉大なる殉敎者の一人の樣に。反時代的な點に於いても偉

大である、時代に循ずる點に於いても――其ヒロイズムを現す爲に畫家と云ふ職業を擇んだ點に於いても――偉大である。胸に聖なる火を、原始的なる表現の要求を、抱いてゐる點に於いて彼の渾身は藝術家であつた。繪畫を此衝動の絶對必然なる啓示と考へ得なかつた點に於いて、彼の渾身は藝術家ではなかつた。彼は其生れた時代によつては偉大なる人類祝福者となる丈の素質を具へてゐた。彼は深い〳〵理想家として、人に對する憧憬の爲に其骨を削り、何處如何なる時にも無限の善をなさむことを熱望してゐた。彼は其書翰の一つに「基督は最大の藝術家である、何となれば彼は不滅の人を造つて何の藝術品をも作らなかつたから。何となれば彼の言葉は――(彼は大人物としてこの言葉を書下すことを輕視してゐた)――大理石又は繪畫以上に其巨大なる力を他人に及ぼしたから。何となれば彼は自分の生息してゐた世界の形が遠く過去のものとなつても猶その言葉が殘る可きことを知つてゐたから。」と云つてゐる。此處にゴーホの全人がある。彼は藝術よりも、寧ろ他人を幸福にする爲に人に與へられたる、巨大にして純粹なる創造力の方を信じた。此創造力は個人を其藝術の虚榮に驅る爲ではなく、大藝術家と云ふ苦しい存在に堪へる爲の報償として與へられたものであつた。彼は彫刻や繪畫が生命の通ふ存在でないことに就いて、痛切な悲嘆を感ぜずにゐられるほど、徹底して藝術家らしい氣がしないことを繰返し〳〵其弟に訴へた。「もつと少額の費用で藝術の代りに生命を創造し得る筈だ」と考へるのは悲しい

ことであつた。此言葉は深い悲劇の色を帶びてゐる。ゴーホと等しく一身を理想に捧げて漸く之を見るに至つた時に、此光景を味ふ者が、此最高の憧憬と幸福とを頒つ者が、自分の他に一人もゐないことを悟る人は、自分自身の運命に就いてゴーホと同じ嘆を發するであらう。

ゴーホは全然匹儔を絶した意味でプリミティヴな人であつた。彼は民衆藝術（クスクンスト）を――民衆の前に公演すると云ふ樣なこととは全然違つた意味で――夢想してゐた。彼はミレーの樣な眞摯を持つてゐた。否ミレー以上、殆んどルーテルに肉薄する眞摯を持つてゐた。ミレーの鉛筆畫の中に潜む希臘精神はゴーホに在つては其ジャイヤントの樣な本能に處を讓つた。彼は全然古典的要素を缺いて、ゴッ〳〵した山の樣に其像を刻んだ

太古の石工を想起させるものがあつた。彼の描く顏は鈍刀を以て堅い木に刻り込んだ樣に見えた。而も驚く可きは此蠻風が効果を阻礙せずして、却つて之を豐富にしてゐることである。彼の頭には常に「人類」の肖像が徂徠してゐた。彼は「搖籃を搖る女」の樣な繪を好事者に訴へずして野人に訴へむことを欲した。此の如き態度を以て描いた彼にとつて、其畫がカリカツールだからと云つて農夫からモデルになることを拒まれるのは隨分つらいことであつたに違ひない。

ゴーホの社會主義は其短生涯の一局面毎に廣くなり、强くなり、深くなつた。自分の最よい物を他人に捧げるやり方の潔さは殆んど不可解とも云ふ可き程であつた。自利心の一厘一毛も――獨創（オリジナリティ）を意識すると云ふ

其最も温和なる形式さへも――彼の心の純潔に影を差さなかつた。「個性」は彼に宿つて如何にも時代のついた、神々しい氣高さに登つた。それは唯無意識として存在するのみであつた。自分の世界には財産云ふ小賢しいものゝ存在を認めぬかの様に、彼は自由に他人より受け又他人に送つた。各個人の所有する物は神の世界の――萬人の前に無限の寶庫を開く神の世界の一部分に過ぎなかつた。彼は其修養時代は固より其成熟時代に於いても他人の構圖を借用して自分の繪を描いた。固より之には賢明なる自己保存の動機も働いてゐた。彼は彼の惡魔を――彼の無限に彷ひ行く空想力（ファンタジー）を恐れた。其空想力は彼が全然其誘惑に身を任せる限り、彼を無際涯の境に導いて遂に彼を病の手に渡した。故に彼は外から框を置

いて之を制御することを考へた。彼自身の告白に從へば、彼の理想は――
力さへ許すならば――聖人の肖像を描くことであつた。「……併し之は
私を興奮させ過ぎるやうだ。私は之をやつたら行きついて了ひさうに思
ふ。後日になつたら、後日になつたら私は又新しい試をやつて見やう…
……併し今は此事を考へてはいけない。私は唯氣分を鎮める爲に野菜的
なサラダ的な習作でもやつてゐなければならぬ。そうして氣分の平和が
得られたなら、其時こそ……私の力が許す丈のものを書かう。」
其處で彼は最も簡單な自然や、靜物や、人物なしの風景畫を描いた。又
彼の愛する畫家ドゥラクロア、ドーミエ、ミレー等の諸畫も彼の蹣跚たる
神興に支柱を與へるものとなつた。之は彼の創造力の缺乏を示すものに

非ずして、反對に其過度を制御する爲に外來の形式を藉りて之に一定の方向を與へたものであることは云ふ迄もない。彼は此等の畫家の構圖に從つた。併し其結果は彼自身の花を植ゑる爲に花壇を藉りたに過ぎなかつた。而もゴーホの模倣したドゥラクロアは眞正のゴーホであると共に更にドゥラクロアであつた。ドーミエの「酒を飲む人」の模倣は眞正のゴーホを示すと共にドーミエたるを失はなかつた。殊にミレーの模倣に至つては新なる世界の發展し來るを覺える。而して彼は此事を前代の大家の作にのみ限らなかつた。ゴーガンは其友に多くの素描を送つた。ゴーホはゴーガンには到底出來ない程強く、健全に之を添補してゴーガンに返送した。共に働く！相互に與へる！之がゴーホの手紙全體を引くるめ

てのモティフであつた。一作毎に全存在の根底を傾け盡して書いた彼は、孤獨なる者は永遠なる物を描くことが出來ないことを感じた。そうして「個人の力を超越する」製作を憧憬した。彼は屢アールズに來て共同に製作することを其友に請求した。一人は構圖をとり一人は色を塗るべき筈であつた。彼は又決して其畫に署名しなかつた。彼の弟又は彼の友に送る繪に其名を書いたのは手紙に名を書くと同樣の意味であつた。彼の愛弟テオは根氣よくグーピル商會を印象派の畫に近けた人であつた。ポンと兩兄弟に共通の希望は美術家の大團結を作つて佛蘭西及の諸市に現代繪畫の最良なるものを示し、既に名を成せる者、新進の者に研究と衣食との資を與へることであつた。

は唯金主であつた。後日ポンツエントが既に自殺して
が落膽の餘り病床に臥す樣になつた時、一日彼の腦中に幸福
浮んだ。それはポンツエントが未知の大金主を發見したと云ふ
た。彼は直にゴーガンに電報を發して巴里に來て契約を締結する
依賴した。ゴーガンが喜びに輝いて巴里に急行した時には、テオは既
未知の大金主に從つて兄の居る國に赴いてゐた。

——併し之は後日の話である。ゴーホはゴーガンと共にアールズに在
る日、既に一度自殺を企てた。併し彼は再び我に歸つて自ら進んでアール
ズの精神病院に投じた。彼が其處で描いた病院の庭には優秀な作が多い。
特に此處で描かれた自畫像（Schuffenecker 所有）を見た人は四角な額を持

つた巨人的な頭と、茫然と開いた眼と、絶望的な顎骨とを到底忘れることが出來ない。深く露出した頸には異教徒のシンボルの樣に、大きい、金色に輝く頸飾が光つてゐる。衣服に滲みた暗紅青色の色帶は絶叫する壁掛の背景に對して、恰も輝ける岩の上を辷る稀有なる天鵞絨褥の調の如くに嘆いてゐる。此の如き線と色と心との悽慘なる莊麗に對する時、人は呼吸の止るを覺えて、此の如き効果を生ずる力は美の異常なる亢進に在るか、此顏の人を威嚇する狂氣にあるかを問ふのが遑がないのであ。

千八百八十九年五月彼は頗る恢復した健康を以て一度病院を
し滿一年の後再びオーヴェー・シュール・ワーズに來て Dr. Ga
つた。ガシエーは美術家に交りの深い醫師であつた。ガシ

に描くことのゴーホの病によくないことを思つた。習慣を改ることが出來なかつた。彼は描く時に帽子を脱出した。太陽は遂に彼の頭上の髮を悉く燒き盡した。彼の腦隔る者は唯薄き頭蓋骨のみとなつたのであつた。

オーヱー時代のゴーホの繪は固より南方で見る樣な色彩の豐麗さつた。併し線描の自在は此時代に於いて頂點に達した。彼の自畫像及びガシエーの肖像は純然としてリズムに生きる作である。其處には何の粗硬もなく、無比の裝飾畫家的才幹は十分に意識して利用された。其他此時代の花卉の繪を見ても幸福なる調和的精神が、一切の「劇」を退けて、其美しき夢を織つてゐる。

併しゴーホは其云ふ可き事を云つた。熱を終るものは熱でなければならぬ。彼は醜さと白痴的病症とに徐々として沈降することを避ける爲に、迅速に美の中に逝かなければならなかつた。強烈無比なる意識を支ふるの力なき肉體は遂に壞り去らなければならなかつた。

千八百九十年七月二十九日に彼は死んだ。

此の如き人が、他に比す可き者なき程純にして強き人が、純なるが故に、強きが故に、破滅すると云ふことは——古の美しきメールヘンに比べて何の遜色もなき奇蹟を以て惠まれたる彼の利他主義が、孤立の儘に過ぎて、小兒の叫びの樣に喧噪の中に響を失ふと云ふことは——悲慘である。我等が依然として我等の英雄を狂者として產まなければならぬと云ふこ

とは悲慘である。唯運命はフアン、ゴーホが殘した不滅の製作によつて我等を慰藉してゐる。（大正元年秋）

大正三年三月二十日印刷
大正三年四月八日發行
三太郎の日記
定價金壹圓
著者　阿部次郎
發行者　西村寅次郎　東京市日本橋區檜物町九番地
印刷者　佐藤保太郎　東京市京橋區新榮町一丁目廿一番地
發行所　東京市日本橋區檜物町九番地　東雲堂書店　電話本局一八七一・振替東京五六一四
文祥堂印行